

宗教と倫理

別冊 第8号

第8回学術大会公開講演 特集号
2007年度公開講演会

公開講演：

2007年10月21日 学術大会 於 キャンパスプラザ京都

大峯 顯： 祈りとモダニティ —宗教から現代を考える— …………… 3

パネルディスカッション …………… 16

公開講演会：

2008年3月8日 公開講演会 於 龍谷大学大宮学舎

村上 和雄： 祈りと遺伝子…………… 34

コメントおよび質疑応答 …………… 47

宗教倫理学会
2009年（平成21年）11月

Religion and Ethics

Separate Volume 8

Open Lecture at the Eighth Congress & 2007 Public Lecture

*Open Lecture, at the Eighth Congress; Omiya Campus, Ryukoku University,
October 21st, 2007*

Prayer and Modernity:

Akira OMINE, Professor Emeritus, Osaka University 3

Panel Discussion:

Panelists: Akira OMINE, Professor Emeritus, Osaka University

Tomoyasu NAITO, Ryukoku University

Hitoshi OCHIAI, Doshisha University

Masakazu TANATSUGU, Kyoto Prefectural University of Medicine

..... 16

2007 Public Lecture; Seiwakan, Omiya Campus, Ryukoku University, March 8th, 200

Prayer and Genes

Kazuo MURAKAMI, Professor Emeritus, University of Tsukuba34

Comments, Question and Answer 47

JAPAN ASSOCIATION OF RELIGION AND ETHICS

November, 2009

宗教倫理学会第8回学術大会

公 開 講 演

2007年10月21日（日）午後1時30分～4時30分

於 龍谷大学大宮学舎 清和館

講 師： 大 峯 顯（大阪大学名誉教授）

講 題： 「祈りとモダニティ—宗教から現代
を考える—」

司 会： 清水 大介（花園大学教授）

祈りとモダニティ ―宗教から現代を考える―

大峯 顯(大阪大学名誉教授、哲学者)

―司会(清水)― 今回は大峯顯先生に、今年度と来年度のテーマの「祈りとモダニティ ―宗教から現代を考える―」のお話を伺います。先生は京都大学をご卒業後、大阪外国語大学、大阪大学教授、龍谷大学教授を歴任されましてフィヒテの研究で学位をとられた方であります。西田幾太郎の研究でも大変有名な方であります。同時に俳人でもありまして毎日俳壇の選者でもいらっしゃいます。「大峯あきら」と記されています。著書『花月の思想』は大変よく読まれています。『宗教の授業』は最近に出たもので、『君自身に帰る』は池田晶子さんとの対談が本になっております。親鸞についての書物が多く、奈良県吉野の浄土真宗のお寺のご住職でもあります。それでは先生、よろしくお願ひいたします。

―大峯― 「近代とは何か」ということは、いろいろな哲学者が考えています。歴史学では近代と現代と区別され、近代史と現代史は違いますが、哲学の見地から見ますと、近代や現代の問題、現代文明に生きている人間の運命の問題を一番深く突っ込んだ人はマルチン・ハイデガーの他にはまだいないと思います。私はハイデガーの信者ではありませんけれども、公平に見てハイデガーほど深く考えた人はいないのではないかと。彼の影響力はものすごいです。単に哲学の領域だけではなく、あらゆる学問や芸術の領域にハイデガーの影響が及んでいます。ひと頃、ナチスに接近したことがあって批判を受けたわけですが、しかしそういう評価も一過性のものであって、ナチスに関係したことは彼の思想の本質ではない。もっと長いスパンで思想家として評価した場合には、ハイデガーに代わるだけの威力ある問いを現代世界の人間の問題について出している人はいないと思います。

ハイデガーは「近代」というのは、今までのヨーロッパの歴史の中の最後の時期と定義しています。ヨーロッパの歴史の最後の時期だと。では近代というのはどこから始まっているか。それは自然科学が出てきた17世紀頃だと考えています。『世界像の時代』(1938年)という、彼がまだヒットラーの政権と関係のあった頃の本で近代の特徴を5つ挙げています。まず近代科学、機械技術(デヒニーク)、それから美学の視圏へ芸術の問題が移されたこと。人間の行為が文化としてとらえられたということ。それから最後に神々が退場したこと。神々というのは多神教の場合の神々ですが、キリスト教のGodを含めて聖なるものが世界から去っていったという5つの特徴を上げています。けれどもその5つの特徴をもっと根本的に言えば、

それは近代という時代は人間というものがあらゆるものの主体になる。サブジェクトになる。そして世界がその主体という人間の前に立つところの客体になった。言い換えると像、ビルト、イメージになった。そのことが近代という時代を特質づける根本の特徴である。近代とは世界像の時代だ。世界が人間の前に立つ客体になった時代だということです。ハイデガーが問題にした近代の詩人でリルケという人がいますが、リルケは世界は客体ではなく、もっと広大な開かれたものであって、人間に対してあるというものではない。人間もその中にある全体、開かれたものが世界の本当の姿だと言った人です。そういう開かれた世界というものが、近代的人間には見失われてしまって人間の前に立つ対象になる。しかもさらにその対象はただ立っているだけではなく、人間がそれを加工したり、攻撃を加えたりして、人間的目標に役立てる対象です。「用象」(Bestand)という言葉はハイデガーは使っていますが、要するに世界が人間のためにある、人間的行為の素材となったということが近代という時代の根本の特徴だということです。

世界全体が人間の前に立って、しかも人間が自分の方へ世界を置いている、世界を表象する(vor-stellen)ことによって世界が像になっている。そういうことが結局、近代的世界というものを技術が根本から規定しているというので、これはどうすることもできない運命だというわけです。技術というものに対するもっとわかりやすい考え方を代表しているのは、カール・ヤスパースという哲学者です。この人の考え方は常識的だからよくわかるんですね。彼によれば、科学技術は人間生活の形成を目的にして、人間が自然を支配したり、改造したりする営みです。つまり、技術とは人間の手による世界の合理化の手段である。知的生活というものを合理化するための、人間にとって住みやすい世界にするための手段が技術です。たいていの科学者や技術者も、技術をこのように考えているだろうと思います。

ところが、その科学技術が実は大きな問題を引き起こしてきた。もともと人間生活に仕えるべき手段であるべき技術が、今や反対に人間を支配するという、逆転の構造を示してきた。そこに技術の危険がある。だから現代から未来にかけての人類の課題は、人間が支配すべきであった技術が逆に人間を支配してきた現状をもう一回正しい在り方にもどして科学技術を掌握することにあるという考え方をカール・ヤスパースはしております。これは『歴史の起源と目標』(1949年)の中でそういうふうに言っております。これは皆、それでいいじゃないかと、誰も異論を唱えないだろうと思います。ヤスパースによれば、技術は単に手段であって、それ自身としては善でも悪でもない。技術は悪魔の仕業でもない、といって神の仕業でもない。善と悪に関して無関心なニュートラルなものだ。大事なことは人間が技術から何をつくりだすか、いかなる目的で人間は技術を使用するのかということだ。人間が技術をどのような制約のもとに置くかということが人類の課題だ。技術に支配されてしまうのではなく、技術を通して最後に人間が人間であることを示す如き人間とは、一体いかなる人間であるか。これが現代の思想の根本問題だというわけです。

おそらくこの点に関する限り、異論はないと思います。ところが、ハイデガーはこういうヤスパーズの考え方は、正しいけれども、真理ではないと。リヒティツヒ(richtig)だけれどもヴァール(wahr)ではないというわけです。ヤスパーズは単に技術の現象を言っているのであって、技術の本質というものは何かということは問うていない。大事なことは技術の現象面を分析したり、それに対する対応策を考えることではなく、技術というものがその本質において一つの謎だということに気づくことが、本当の哲学の問いでなければならないというのです。

そこで彼はヤスパーズの本より後に出た『技術への問い』という本の中で、技術の現象と技術の本質を区別するというテーゼから始めています。ハイデガーの言い方を引用すると、技術の本質は全く何ら技術的なものではない。したがって我々が単に技術的なものだけを表象したり、追求したり、それで満足したり、それを回避したりしている限り、我々は決して技術の本質への我々の関係を経験することはできない。それだけでは我々はたとえ技術を熱烈に肯定しようが、否定しようが、我々はどこにおいても技術に不自由に縛りつけられたままである。もし我々が技術を何か中立的なもの、先程ヤスパーズが言ったように善でも悪でもないニュートラルなものとしてとらえるならば、我々は依然として最も忌忌しく技術に引き渡されているのである。なぜなら今日、人が好んで信奉しているこの種の考えが、我々の眼を技術の本質に対して完全に見えなくしている。今の科学者は皆、技術を信奉しています。特に物理学者は技術主義者ですね。技術が真理をとらえると確信している人が現実におります。それに対して技術は悪魔だと、技術は嫌だという技術に対する拒否をする人もいますが、その両方とも技術の本質というものを見ていないというわけです。

ハイデガーの技術論の一番の特徴は、技術は決して人間の手段ではない、技術にかかわることは人間の行為でもない、我々が技術の本質というものに深く思いをいたすことがなかったら、技術というものが持っている大きな危険を本当に超えることは不可能だということです。たとえば原子エネルギーの平和的管理が盛んに言われています。人間が原子爆弾を使わないように原子力を人間の平和な生活のために使うようにしっかり管理しておれば、それで技術の問題は解決すると言いますが、しかしその管理するという発想が、やっぱり技術的なんですね。いかにして技術を管理するかという、人間が人間の意思によって自然を管理するように自分たちがつくっている技術の作用を管理するという考え方が、すでに我々がもう無意識のうちに技術によって支配されているということを証明しているというわけですね。

そこで技術の現象面だけでなく本質において「技術とは何か」ということを問わないといけない。結論として言いますと、彼によれば、技術とは人間の行為とか、人間の生活の手段ではなく、真理というものが現れてくる一つの形態なんです。技術が真理の一形態だということに、技術からなかなか我々が解放されない本当の理由がある。技術の現状が間違っただけになってしまったから、そこからどうやっ

て我々が逃れるかということを考えますが、技術というものは実は真理の現れ方の一つなんだというのが、ハイデガーの考え方です。「技術はその本質においては忘却のうちに沈んでいる存在の真理、ザインの真理の存在歴史的なゲシックだ」。ゲシック(Geschick)という考えは、ヒストリー(Historie)と区別されたハイデガー特有の概念です。ヒストリーとは歴史学者の問題にしている歴史です。つまり国家の興亡とか人種の興亡、戦争、年代史的な出来事の年代記的なプロセスですが、ゲシヒテは現象面でなく、もっと深層の次元の歴史、深層の歴史と言った方がいいのではないかと思います。仏教に正像末史観があります。お釈迦様が亡くなられてから500年たったのが正法期、それから1000年たつと像法期という。正法は教えがあり、行ずるものがあり、その真理を悟るものがある。像法時代は教えがあつて、行ずるものがあるが、悟るものがない。それが1000年。そのあとは末法の時代になると、教えはあつても、それを行ずる人もいない、悟る人もいない。それが1万年続く。親鸞という人は末法の歴史次元を本気で自分の信仰体験に結びつけて考えたわけですね。他力によってしか救われないという、自己の現実が自己の中にある歴史的な現実というものと結びついている。道元は末法ということは、お釈迦様は方便として言っているのであつて、いつも正法である。悟れないはずがない。悟れないのは努力が足りないからだといった人ですが、こういう人は親鸞からすると現実感覚が薄い。別に現実感覚が薄いから人間的にだめだというわけではないですが、タイプとしてそういうところがある。歴史的現実の感覚がない。真理というものは歴史的現実というところで受け取られなければならないのであつて、自己の現実というものを見たら、とても悟れない。そういう正法末の史観は、ヒストリーよりも深層の現実認識です。親鸞聖人はちょっとヒストリー的な言い方もしております。現代の時代は、元仁元年(1224年)は涅槃経などの説によると末法に入つて、すでに683年たっているという記述が『教行信証』にありますから、これを見ますと、ヒストリー的な考えをしているようだけれども、しかし実際には正法、像法、末法ということ、ハイデガー的に言えば、ゲシックの「深層の歴史」として受け取っていたと思うんです。

ハイデガーの原文(翻訳)を引用します。「技術はその本質においては忘却の中に沈んでいる存在の真理の存在歴史的な歴運である。即ち技術は単に名前の上でギリシャのテクネーに遡るだけでなく、本質歴史的にアレーテイア、即ち存在するものを露にすることの一つの仕方としてのテクネーまで遡る。真理の一つの形態として技術は形而上学の歴史に基づくのである」。これは非常にわかりにくい文章ですね。技術は形而上学に最も遠い反対のものではないかと普通は考えます。形而上学は「本当にあるものは何か」を考える学問ですから、技術というものと正反対のものであると考えますけれども、しかしハイデガーはそうではなく、近代の科学技術の一番の根源は古典ギリシャに、プラトン、アリストテレスの哲学にあるというわけです。

二千数百年の歴史を貫通してきているものの帰結が今、科学技術として露呈して

きたというのです。二千数百年の間、ヨーロッパ人がそのことに対して疑問を抱かずに考えてきた、自明として考えてきた考え方、つまり形而上学の帰結が科学技術となって今、現れている。それは一面から言うと「真理が現れてくる形態」ですから、それをやめるわけにいかない。けれども同時に、その現れ方は、その他の現れ方、科学技術という形の存在の開示以外の開示をできないようにしてしまう。科学技術的な存在の開示だけが唯一のものとして支配しだして、その他の開示の現れ方を拒否するようなものとなっているところに現代の技術の大きな問題があるのだというわけです。

そういう技術に携わるのはもちろん人間であります、しかしそのことは人間が科学技術の主人公ということではない。ヤスパースは主人公と考えていますから、人間を支配してきた技術の力を逆転して、もう一回人間に取り戻そうと考える時には、科学技術の主体というものは人間だという自明の考え方に立っているわけですが、ハイデガーはそれは単に技術的なものを見ているだけであって、技術の本質を見ていないから、そういう考え方になるんだと言うわけです。

技術は惑星的な規模になって、全地球上に広がっている。人間のあらゆる文化の領域、人間のあらゆる営みが技術によって規定されている。今までは技術は文明の中の領域の一部として働いていた。これはハイデガーの本が出る前のベルグソンとかマックス・シェーラーのような考え方、特にベルグソンは明らかに科学技術は文明の一部だと考えています。ベルグソンは神秘主義と機械主義の統合ということを言いだして、科学と宗教をどうやって統合するかという課題を『道徳と宗教の二源泉』で言っています。科学技術は労働時間の短縮によって人間に余暇を与えてくれる。余暇を使って人間が本当に大事なことを考えるということが可能だから、科学技術は却って人間が大事なものを考えることを可能にしてくれるものだと楽天的に考えていたわけです。そういう時には科学技術は明らかに人間の文明の一部なんですね。けれどもハイデガーはそんな段階はとっくに乗り越えられてしまったといいます。あらゆるものが技術として現れている。技術の支配は文明の隅々まで及んでいると言うわけです。たとえば単に機械技術とか、自然科学の研究とかだけではなく、国家の体制、官僚体制、大学、芸術、その他隅々にまで科学の技術の支配が徹底して行き渡ってしまったという考えに立っています。そういうことが出てくる理由は技術の本質が真理を露にする一つの形だ、仕方だということにあるからだというわけです。技術は人間の誤算ではなく、どうしても真理を露にするということだからやめるわけにいかない。けれども、その真理を露にするやり方が、他の真理の現れた方が出てくるのを全部塞いでしまうことになる。そういう技術に今や人類は参加している。人類がそういう歴運に参加しているというのが近代の技術の現状の本質だというわけです。

技術文明に対して多くの人々はどこか不安めいたものを感じながら、しかもそれをどうすることもできないという我々の現状の理由が、これでよくわかるのではな

いかと思います。ハイデガーは、いろいろ新しい言葉をつくりだして、そういう技術の本質に肉薄しています。たとえば、「ゲシュテル」(Gestell)と言う。組み立て、立て組みを意味するこの言葉は哲学的概念ではなかったんです。哲学史の中でこんなものは哲学の概念として出てきたことはないですね。近代人は世界を我々の前の対象として見る。我々に向かって立てるということだと言いましたが、立てるということは、いい意味にも使いますが、悪い意味にも使います。小学校でよく悪いことをしたら立たされた。強制を含んでいる。我々は科学技術を使って自然を我々の前に立たせているが、同時に科学技術によって我々が立たされている。我々が使われているということですね。我々は科学技術という正体を隠した不気味なものによって使われている。そういうことをゲシュテルという言い方で捉えているのです。これは自然に向かって「何かを供給せよ」と要求を押しつけること、そういう仕方での真理の現れ方ですね。技術はテクネーに遡る。現代の技術は語源的にはギリシヤの職人たちが家や船をつくったりする場合のテクネーに結びついている、ポイエーシスと結びついているわけですが、同時にそれとは全く違った側面を持っている。たとえば昔の風車には風に向かって「風を提供せよ」という性質がありません。文字通り風任せです。ところが現代技術は風車ではなくエネルギーを貯蔵するために気流を開発したり変形したりする。

技術の挑発は田園をも支配しています。田園は昔は農夫が耕作という手入れによって作物が大地の力によって生育していくのを見守っていたような場所であったんですが、もはやそうではなくなりました。現代の食糧産業はすでに大気を窒素の提供のために仕立てており、耕作という仕事は一種の食品産業に代わっていきつつある。ライン河の中に立っている水力発電所がライン河というものを昔とは全く違うものにしていて。昔、ライン河の兩岸を結んでいた渡し船とか橋とかはライン河という大きな自然の中にあっただ。水力発電所は何百年ラインの兩岸を渡してきた木橋のように立っているのではない。木橋はラインの流れの中に立っていたけれども、今日のラインの流れは水力発電所の中に立たされているといった方がよい。ラインという河は発電のための水圧の提供者としてのみ、そこに現れている。「いや、そんなことはない、今だってライン河はきれいな流れじゃないか、観光客は見物にあってローレライの岩を眺めて楽しんでいるじゃないか。結構美しい流れであることは変わっていない」と、ひとは言うかもしれない。しかしそれはレジャー産業が仕立てた旅行団のための観光の対象以外のものではなくなりました。このように、技術の支配が、あらゆる領域にまで及んでいるということを使うわけです。

ここからハイデガーがいう技術の危険というものが出てくるわけです。技術の危険は技術は虚偽とか、誤りではなく、真理の現れ方だということにある。技術としての真理の現れ方が出てくる時には、それ以外の真理の現れ方をすべて拒絶する形で出てくる。そのことはどういうことか。技術がそれ自身の本質を露にするとき、それ自身の本質を裏切ること、つまり真理を隠すことが起こるということです。真

理を露にするはずの技術が真理を隠す。人間に対して存在の真理を隠すという仕方
で出ているものが技術の危険というものだというわけです。技術の危険はそういう
厄介なところにある。

技術の本質をなすところの立て組みは、真理の輝きと統率を塞ぎ立つ。真理が露
になることを塞いでいる。真理を露にする仕方の一つである技術が、実は真理その
ものの現前を塞いでいる仕方に出ているという厄介な状況です。だからその仕立て
の中へと、すべてのものを差し向ける歴運は極度の危険です。技術は危険なもの
というのではなく、危険そのものであります。ヤスパースは技術の魔性を言ったん
ですが、ハイデガーによれば、そんな技術の魔性というものは存在しない。そう
ではなく技術の秘密がある。技術というものが何であるかわからない。自分を露にす
る、真理を露にするという仕方に出ている技術が、真理の現前を拒絶している
というのは一体どういうことなのか。一体、真理とは何か、技術とは何かという不
思議、謎の前に我々は置かれているということです。謎はヤスパース流の技術によ
って支配されている人間が、どのようにしてもう一度自分に指導権を取り戻すかと
いう発想では決して解決しない。そういうところに安心している限り、我々は依然
として技術に支配されているのではないか。真の自己を取り戻すことはできないの
だというわけです。

そこで技術の危険とはどういうことか。大抵の人は科学兵器や環境汚染のことを
思い浮かべるだろうと思います。人類の生物的存在が不可能になるかもしれないと
いう危険です。しかし、この種の危険はあくまでもプロバビリティの域を出ないと
思いますね。核戦争や汚染がなくても人類が永久にこの惑星の上に生き続けること
はないわけですね。これから汚染が進まなくて、これくらいで止まっても地球
が永続することはないわけですから、ハイデガーが問題にしている危険はプロバビ
リティとしての危険ではありません。たとえ自然エネルギーが技術によって平和的
に管理することに成功したとしても、依然として危険はある。まさしく技術を平和
的に使って人間存在に快適な地上の空間をつくるのが人間の存在理由と最高善だ
という考え方が人間にとりつく、そういう危険です。人類が滅亡するかという危険
ではなく、人間が人間でなくなる危険ですね。たとえ生存していても、人間が本当
の真理、技術よりももっと深い根源的な真理の呼び声に耳を傾ける力を喪失してし
まうかもしれないという危険、それが技術というものの本当の危険だ、危険そのも
のだというわけです。人間の生物的存在を脅かす危険ではなく、人間存在の本質を
破壊する危険です。人間が人間でなくなる危険ですね。それを彼は技術の危険だ
と言っているわけです。

今日、我々の惑星を襲い始めているのはそういう種類の危険なのでありまして、
すでに我々はそれに襲われている。その危険は外から人間を襲うのではなく、内部
から人間を襲うんです。そして、さらにその危険の危険たるどころはどこにあるか
というと、皆が平気でいるところですね。その危険を前にして何とも思わない人が

一杯いるということです。人類はこれまで何十万年か、いくたびも生存の危険を乗り越えてきましたが、ハイテクノロジーの含んでいる危険は、これまで経験しなかった最大の危険、危険そのものだ。外見的な繁栄と進歩の見かけを誇っている我々の技術文明は、今日すでに姿なき何物かの襲撃を受けている。それがハイデガーが問題にしている点ですね。

この不気味な襲撃に対して我々はどういう態度をとったらいいか。これは人間とは何かという問いにかかわる危険ですが、しかしこの危険は、過去の間人類型、仏教やキリスト教や古典哲学が説いてきた「人間とはこうあるべきだ」という人間の理念を実現することが不可能になるだけではなく、もはや人間とは何かという問いそのものを立てなくなるかもしれない、という危険です。「私たちはなぜ生きているか。なんのためにここにいるのだろうか」という問いを立てなくなる。なぜ人間として生まれたのか、その大きな不思議を不思議とも思わなくなる。私はときどきこのことを実感しますね。お寺で仏教の話をしましたら皆全く楽天的です。まるで宇宙人の話のような顔して聞いている人もいます。そうすると、これは大変なことが起こっているのではないか。お寺参りをしている人ですよ。親鸞聖人のお話をするんだから、嫌だと思って来ていないはずですよ。ところが、すべての人ではないですが、「生きているとはどういうことでしょうか」と言ってもポカンとしています。問いが立てられなくなっている。これは大変です。これがハイデガーが言っている危険だと思います。とにかく生まれたんだから生きることは大事だとなるわけであって、そういう危険、それが人類を襲っている危険というものの本質だということです。

それでは科学技術のこの危険に対処する方法は何か。ハイデガーははっきり言っています。「技術というものがもともと人間の生活の合理化の手段でなくて、真理の現れ方の一つである限り、その技術の含んでいる危険もまた人間の意思的な努力とか、知的な思いつきなどによっては決して克服されるものではない」。この点では非常に悲観的です。おそらくどんな人間の主体的意志も、技術の危険を克服することは不可能である。もしもその危険から救われる道があるとしたら、それは技術それ自身がその深い本質において変貌するという仕方以外にはない。技術の本質は動揺している。じっとしていない。技術は本質の領域において動いている。その動揺の中に危険というものを脱する、ある可能性が含まれているかもしれない。この言い方は、ハイデガーは慎重でありまして「ある」とは言わないで、「あるかもしれない。ないかもしれない」と言う。技術と別のところから既成の宗教的な観念を入れてくるとか宗教とか道徳というものを持ち出してきて、技術一辺倒ではいかんと説教をして、事態を変えることは不可能だと。なぜなら科学技術は宗教的な団体の中にも入っているからです。お寺の中にも入っているし、教会の中にも入っている。それは感じますね。教団運営ははっきり技術ですからね。それほど不気味なものです。

宗教的な説教によって技術というものの危険を知らせるということは不可能であ

る。技術の本質そのものにおける転回以外に技術の危険から救われる道はない。それじゃ、人間は技術の本質における転回をただ待っているだけかということ、そうではないわけです。人間にすることが一つある。むしろ人間に課せられている極めて重要な大切な一つのことがある。それは人間が何かをするということではなく、むしろ何かをなそうという意思や計らいの態度から離れるということだと言うんですね。ものを支配しようとする態度と違う態度が人間の中から出てくるということ以外にないというわけですね。

結局、ハイデガーは人間の態度の根本はものを考える、考え方にあるということです。「考え方を変えたって技術の危険はどうにもならないじゃないか。哲学者の考えていることなんか、夢みたいなもので、何の役にも立たない」という意見がすぐ出てきます。役に立つとか立たないというのは、すでに技術に支配されている考えなんです。思考というものは、もともと何かの役に立つものじゃないんです。むしろ、役に立つとか立たないかという発想から離れるところに、ものを考えるということの一番大事な役割がある。『大無量寿経』が説くように、法蔵菩薩が十方の衆生を救おうとする時、考えたんですね。人間が考えるということは、人間だけでなく仏も考えるわけで、考えるということは人間の次元を超えています。神はしりませんが、仏は考えたんです。「弥陀五劫思惟の本願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞ひとりがためなりけり」という、『歎異抄』に出てくる言葉がありますが、ものを考えるということは人間だけではなく、仏様の仕事でもあるわけです。考えて名号が出てきた。名号によって救うということは五劫にわたって考えた結論です。そういう深い思惟がハイデガーは人間に残されているただ一つの大事な仕事と見ています。しかし、ものを考えるということは、普通は自分がものを客体化することだと思い込んでいるんです。つまり自分の前にあるものについて、自分は何かを考える。それはものと自分との間の距離をとる。自分がものになったら、ものは考えられない。普通には考えることは自分がものではなく、ものを見るものだという立場に立っている。考えるためにはものに自分がなったりしちゃいけない。ものとならないことが、ものを考える正しい根本条件だと。それが普通になっています。西欧のハイデガー、近代の特徴は世界を自分の対象として、世界を像にした。「客体化」という思想がはっきり出てきた。

ハイデガーはそういう客体化的思考に根本的な疑問を出した、おそらくただ一人のヨーロッパ人だと思います。ものを考えることはものを客体化することだということが、批判の洗礼を受けないままにヨーロッパ文明に通用している。これはヨーロッパの哲学者と議論するとあたりまえのことで、ものを客体化する、冷静に考えることが考えるということのすべてだとなりますが、ハイデガーはそういう考え方は自然科学的思考の場合だけであって、思考のあらゆる場面にそういう特徴は通用しないと断言しています。たとえば、カントにとって客体、オブジェクトという概念は、自然科学的経験の実存する対象を意味する。あらゆる客体は対象になる。し

かし、あらゆる対象、物自体は決して客体なのではない。定言的命令という道徳法則とか倫理的行為、義務は自然科学的な経験の対象ではない。それが考えられたり、それが意思される場合にも、それによってこれらのものが客体化されたわけではない。あらゆる思惟は皆、ものの客体化だという主張は根拠を欠いている。現象というものに対する侮りがある。たとえば我々がきれいな花を見て、公園に咲いているバラを見てバラがきれいだなと思う時には、バラを客体として見たわけではない。我々はそれに見とれて放心し、心楽しくなったところの相手は、時間、空間の中にあるながら、しかも時空を超えた次元の中にある。それは客体ではなく、我々の友なんです。愛する人のことを考える場合でも客体化ではない。恋人のことを考える時は恋人を客体化したわけではない。病気の友だちのことを「どうしているだろうか」と思った時には、我々はそれを客体として見ていない。親が子どもの運命についてあれこれ思う場合の子どもは決して客体ではない。客体化でない仕方で、我々は相手を正しくとらえている。客体化しないでしかとらえられないものがあるのです。相手と自分との間の距離を飛び越えて自分が相手になる時に初めて、ものを正しく考えることができるという、そういうことを我々の経験でいくらかもやっていると思います。

そうしたら、実はこのような態度こそものを考えることの根本ではないかと思ってみることができるわけです。阿弥陀如来の本願の根源にあった五劫思惟とは、阿弥陀が衆生になったと考えたということだと思います。衆生というものの身になった。デカルト哲学がいうような「我考える故に我あり」という主体としての自分が客体としての対象を考えるのではなく、自分の我がなくなって、ものになりきったところでの思惟です。相手になりきった。衆生の身になりきらないと衆生を救う道は決して着想されなかったと思います。法蔵菩薩に衆生を救う道が開けたから安心して阿弥陀になったわけですが、これを可能にしたのは衆生の身になるという根源的な思惟です。救われ難い衆生の身になる。相手の身になるという仕方で考える時に、本当に考えるということが起こったわけです。これは何も仏様の話をしているわけではなく、思惟の本質の問題を言っているのであります。

『大無量寿経』のはじめのところは、我々がものを考えるとはどういうことかを教えていると言えるのではないかと思います。西田哲学では「ものとなって考える」という有名な言葉があります。ものとなって考える、ものとなって行う。自分がものと距離をとっている時にはそのものを本当に考えたことになっていないということを言いますが、私もまさしくここに本当の思考というものの原型があるのではないかと思います。

ハイデガーも最後に科学技術というものの危険から我々が免れることができるとしたら、我々が、ものをあるがままに保ち、受け入れる、所有や支配でない、科学技術と人間との主導権争いの外へ出る。主導権をこちらに握るのではなく主導権争いの外へ出る。それが我々に残されたただ一つの道ではないかと言っているわけで

す。そういうわけで、人間に要求されていることは単に技術的なものにこだわるのではなく、技術の中に起こっている本質を思惟することだ。技術に盲目的に没頭したり、反対に技術を一つの悪魔と見て、これに反抗するような、そういう態度は両方とも技術の本質を見ないで、ただ現象的な技術的なものにこだわっていることにすぎない。人間を支配している技術をいかにして人間に取り戻すかという現代に流行している発想ほど誤ったものはないとハイデガーは言うわけです。おそらくヤスパースを念頭に置いて言っている言葉ですが、技術の危険というものを真剣に考えた時に説得的だと思います。ヤスパースは「悟性的思考ではなく、理性的思考への転換がいる」ということを言っているんですが、この場合の理性的思考とは、どういうものであるかということとは非常にはっきりしないと思います。哲学的思考を理性的の思考と言っていますが、その場合の「理性的である」ことはどういうことか。理性的であるということはものと仲良くすることだという考え方はヤスパースにはありません。ものと友だちになる。こちらの意思によってもものあり方を変更したり、修正したりすることではないということまで行っていない。依然としてヤスパースの考え方は理性主義、理性主義は形而上学ですから、どれだけ実存主義を強調しましても、彼は実存だけではだめで、理性と実存の両方がいるという考え方で。依然としてヨーロッパの考え方から脱却していないと思います。

ハイデガーの方は古典ギリシャ以前のソフォクレスとかヘラクレイトスその他の哲人たちの断片に出てくる思想を再発掘しようとしています。世界があるということは、ものがそこへ現れているという、我々に立っているのではなく、我々がそれを使用するための材料としてあるのではなく、ただ露になっている。アレーティア、自分を現しているという思想をプラトン、ソクラテス以前のもっと古い時代の哲学者や詩人は語っている。それを模範としてハイデガーも技術の問題を考えるわけですが、しかし、文明は西洋文明だけではないんだから、どうして東洋の文明の中にあるものの考え方、特に仏教の考え方に興味を持たないんだらうかという疑問がありますね。いつか西谷啓治先生が『碧眼録』を持っていったら注意深く聞いてメモをしていたというんです。『歎異抄』にはあまり関心を示さなかったと言いますから、なかなか頑固でヨーロッパの伝統を離れない人みたいですね。技術というものの問題は、あくまでも技術が起こった文明圏の伝統に即してしか解決できないという考え方をするんですね。それは確かに我々の文明もヨーロッパの文明ですから、それは賛成なんです。しかしそれを考えるときの一番の基礎が、再びヨーロッパ的なものでなければならないということは疑問だと思います。

東洋の詩人たちの存在理解、たとえば「笈の小文」の中に出てくる芭蕉の有名な文章は、日本文化論を言う人は誰でも言います。「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利久が茶における、その貫道するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造花にしたがひて、四時を友とす。見るところ花に非ずといふことなし。思うところ月に非ずといふことなし」。国文学者はわかっていないで

すね、芭蕉研究者が芭蕉にタカをくくっています。花や月は美的な存在であると解釈してしまう。しかし、芭蕉は「美的」なんて言ったことはない。美は近代の国文学者の観念です。つまり彼らは国文学をやっていながらヨーロッパ的な考え方をしているわけですね。「思うところ月に非ずといふことなし」。月のことばかり思っていることか、そんなことではないですね。世界や人生を考えるとこの時の考え方の根本を言っているわけです。月を考えると月を分析することではないわけで、月と自分が友だちになるということなんですね。それをなくしたら人間は人間でなくなる。「かたち花に非ざる時は夷狄にひとし」。万里の長城の北におった人々を昔の中国人は人間じゃないと思った。心が花になかったら人間でなくなる。人間存在が墮落する。「心花に非ざる時は鳥獣に類する」。人間でないものという意味です。鳥や獣が悪いというわけではなく、人間とは何かの問題を言っているわけです。「夷狄を出て、鳥獣を離れて、造花に従い、造花に帰れとなり」。これは実に人間存在はどのような条件において人間存在になるかということと言う人間存在論なんです。ところが国文学者、芭蕉の研究者は一言もこれに触れないみたいですね。花や月は「自然美の代表」と言ってすませています。これもハイデガーが言うように「近代では芸術の問題が美学の見地に移された」ということです。美学の見地へ芸術の問題が移されたというハイデガーが言うことは、芭蕉の「笈の小文」の国文学者の解釈において明らかに起こっていることですね。そういうことを思いますと、技術の問題は領域が広いのです。人間存在の一部分の領域ではなく、我々の考え方や感じ方や、生き方のすべてを規定している巨大なもの、その巨大な何物かに襲われているのが、今日の人類の現状です。そういう問題に対面するには、どういうことが我々に起こらないといけないかということを考えなきゃならないと思っています。

このへんで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

一司会 先生、どうもありがとうございました。ただいまを以ちまして午後の公開講演を終了させていただきます。

パネルディスカッション「祈りとモダニティ —宗教から現代を考える—」

パネリスト： 大峯 顯（大阪大学名誉教授、哲学者）

内藤 知康（龍谷大学教授）

落合 仁司（同志社大学教授）

棚次 正和（京都府立医科大学教授）

司 会： 清水 大介（研究プロジェクト委員長、花園大学教授）

—司会（清水） 今日「祈りとモダニティ」というテーマで、大峯先生からご講演をいただきました。まず、祈りの方から先生にお話を伺いたいと思う次第です。大峯先生から、よろしくをお願いします。

—大峯 数年前に僕の発言が問題になったことがあって、僕の発言を毎日新聞が正確に報道していたら問題はなかったんですが、中外日報は正確に報道したんですよ。その時の10月の宗会で「念仏と祈り」について宗会議員の方が質問したことがありました。その人は平和を祈るローマ法王を取材してアッシジに行ったんですね、そこへ本願寺の議長として。その宗会議員から「祈り」ということについて質問があったんです。僕はその時、祈りということは現世祈禱と限定したら浄土真宗では親鸞聖人も現世を祈ることではお浄土にいけないということをはっきりしていますから、人間のエゴ的な聖道への道は真理への発露ではないから、それはだめだと言いました。『恵信尼文書』を見ますと親鸞聖人は「後世をいのらせたまひける」とあり、現世では後世を祈ったと。永遠の問題ですね、この世の問題ではなく。後世を祈ることは菩提心ですね。その時に「祈り」という言葉を使っている。願うといってもよさそうだけど、ある教学者は本願寺会報で「願いであって祈りではない」と書いています。祈りという言葉は願いなんだと。しかしそれでは根拠にならない。親鸞聖人のように厳密な言葉の使用者が「願いと言わないで、なぜ祈りと言ったか」という問題がありますね。

広く宗教学の見地からしたら、宗教学はヨーロッパに生まれた学問ですからキリスト教的な宗教体験が主になっていますから、そこから発想していきます。けれどもフリードリッヒ・ハイラーの『祈り』という本では「仏教の中にも祈りがある」と言っています。キリスト教だけではなく「祈りは無限者と個人との交渉を言う」

と。関係を言うと。有限者同士の関係ではない、無限に対した時に祈りという関係が出てくる。その規定は主として人間の方の側からハイラーは言っているんですが、たとえば僕はもっと広げて、人間だけで祈るのではなく無限者も祈ると。阿弥陀さんが祈る。阿弥陀の本願は何か。「衆生が成仏するように」という無限者の祈りだと言ったらいいと思います。阿弥陀さんが祈って祈りが成就して我々の成就が約束されているから、我々の衆生の側から祈る必要がない。浄土真宗には祈りがないのではなく「祈りはいらぬ」といことだということです。無限者が祈っているから。祈りというものを離れて、宗教を他の道徳や芸術、政治や経済から区別する特徴は何もないんですね。道徳には祈りはない。芸術もない。政治や経済にも、もちろんない。ただ宗教という特別な領域だけが祈りというものを持っていて、それが宗教を特徴づけるメルクマールだということは言えると思うんです。

ヨーロッパのキリスト教的な宗教だけではなく、おそらく宗教である以上、無限者との交渉で、浄土真宗の場合はすべて阿弥陀、無限者の廻向になるわけです。四十八願の中で、もし私が仏になった時、十方の衆生が往生しなかったら自分は仏にならんとあっていて、あれは祈りですよ。誓いと言っていますが。同じことを、概念を変えて言ったのです。願というものはそんな悠長なものじゃないですよ。もっと切迫したものがあるのであって、それが無限者の側が、そういう思いを持っている。我々は皆、如来に祈られている。そういう祈りの中に私が生かされている。我々がこちらから「ああしてくれ、こうしてくれ」とする必要がないと言えば、トラブルにならないと思うんですが。あの時は大変でした。「お前なんか、所長を辞めろ」と言われて。僕に直接言ったのではなく若い人のハガキを見て知りました。あれを見たら「浄土真宗もまだ生きているな」と思った。カッカしているだけだからね、そういうファナティックな人がいました。言っていることを正確に読んでほしいと思いますけど。「祈りは敵だ」という硬直した考え方、それが宗教心だと思違いしている現状もあるだろうと思います。

もう僕だけでなく鈴木大拙、曾我量深が昭和2年に書いた「浄土真宗の祈禱」という論文がありますよ。「浄土真宗と祈禱」ではなく「浄土真宗の祈禱」ですよ。浄土真宗の祈禱は阿弥陀の本願のことです。80年も前です。鈴木大拙は「祈りのない宗教はない」とはっきり書いています。それが墮落すると、いつのまにか祈りをこちら側の人間の側がやることだと、阿弥陀がやっていることを、こちらがやろうとする、それはとんでもないものになっちゃいますからね。それはいろいろ危険があるので「祈りという言葉は使わない方がいい」という組織の上の親切心でね。多分、そういうことだと思います。それも大事ですけど、しかしあまり教条的になると、教義は守ったが、信心がなくなる。教学は栄えたが、信心がない。今はそういう現状ですね。皆、熱心に勉強していますが、『教行信証』を勉強しているけど、肝心の信心がない。その人の言うことは迫力がない。その説教を聞いても誰も信をとらない。「よく勉強してはりますね」というだけで。今、そういう状況があるよ

うに思います。といって「浄土真宗に祈りがある」と言う必要はないですけどね、改めて。そういうところはちゃんと心得ておくことがいいように思います。私の考えです。

一司会 大変貴重なお話をありがとうございました。今のお話は私どもの方でお願いしてお話ししていただいたことですので、却ってご迷惑になったのではないかと恐れるものです。それではまず、パネリストの皆さんのご紹介をしたいと思います。内藤知康先生です。龍谷大学大学院をご修了され龍谷大学文学部教授です。ご専門はインド哲学、仏教学、真宗教義学で、浄土真宗本願寺派の勸学のお役目を担っておられます。ご著書として教学の方面、信者さんへのお話として出ております『わかりやすい名言名句—親鸞聖人のことば』『安楽集講読』『御文章を聴く』『安心論題を学ぶ』法話集『やわらかな眼—法話集』など、論文も多数ございます。

落合仁司先生です。同志社大学経済学部教授、本学会の副会長です。専攻は宗教学、宗教数理解析です。東京大学経済学部を大学院まで、それから同志社大学経済学部へ移られました。モダニティのテーマは副会長である落合先生からの発題です。ご著書に『保守主義の社会理論—ハイエク・ハート・オースティン』『トマス・アクィナスの言語ゲーム』『地中海の無限者—東西キリスト教の神—人間論』（勁草書房）『<神>の証明—なぜ宗教は成り立つか』『ギリシャ正教—無限の神』（講談社）、また宗教の数理解析など、『宗教研究』に論文をいくつかご発表です。

棚次正和先生は京都府立医科大学人文・社会科学教室教授です。京大文学部、同大学院、筑波大学助教授（哲学・思想学系）へ。その間、シカゴ大学神学校高等宗教研究所シニア・フェローを経て、京都大学博士号、学位をとられて、筑波大学から京都府立医科大学へ移られました。ご著書として『宗教の根源—祈りの人間論序説』は今回のテーマにぴったりの本です。共著で岩波講座『宗教2 宗教への視座』、編著『宗教学入門』がございます。京都大学が生み出した宗教学、宗教哲学の代表者の一人と見なしてもいいのではないかと考えております。

内藤先生から大峯先生にご質問していただき、ご回答をいただきます。それでは内藤先生からお願いいたします。

一内藤 このシンポジウムに関して清水先生から大峯先生のご講演を受けて、それについての発言をせよと言われました。大峯先生のご講演を、祈りをテーマにということで勝手に決めつけておりました、それについて発言する予定だったんですが。祈りという言葉自体、大峯先生のご説明にもありましたように、『中外』の記事によりますと「祈りというのは聖なるものと人間の内面的なものとの交流だ」とおっしゃっておられるわけですが、祈りという言葉が本来そうなのかということは、ちょっと問題があるのではないかという気がいたしております。『日本古語辞典』を引きましても、そういう意味合いが出てまいりません。『恵信尼文書』をお引きになりましたが、あれはあくまでも六角堂に籠もっておられる間のことでありましたので、獲信以前、真宗学的に言うと、まだ自力的状態にあるうちの言葉だということでご

ざいますので、あそこの祈りはあまり根拠にならないのではないかという気はしております。祈りという言葉は本来そういう意味だったというよりも、キリスト教におけるそういうものが日本語の祈りと訳されたということで、そういう概念が祈りという言葉に入ってきたのではないかという気がしております。

祈りということを考えます場合に、一般的な祈りという言葉がどう受け止められているのか。宗教学的にどう祈りという言葉が使われているのか。親鸞は祈りという言葉はどう使ったのか。真宗では祈りという言葉はどう使っているのか。このあたりをきちっと整理することが必要なんじゃないかという気がしております。

そこで一言、浄土真宗はあくまでも伝道教団でございますので、祈りという言葉を使うことが、その伝道においてどういう効果を及ぼすのかということも一つの大きな問題だというように考えております。今日の先生のご講演、まさに専門外のことでございますので、おそらく十分な理解はできていないと思っておりますけれども、いくつか先生にご質問させていただきたいと思っております。たまに親鸞聖人と出てくると、そこだけパッと耳につきまして、そのことだけがえらく気になることがございますので、先生ご自身からしますと、発言の言葉尻だけとらえているというふうに思われますのは誠に申しわけないことでございますが。

一つは正像末の三時史観のところでも末法の時代性を大事にされた。まさにその通りなんですけども、ただ親鸞聖人にはもう一つ、末法という時代性を大事にされると同時に、ご和讃の中には「正法の時機と思へども、底下の凡愚となれる身は 清浄真実のころなし 発菩提心いかがせん」と詠われ、たとえ正法の時期でもだめだろうと言われる。「三恒河沙の諸仏の 出世のみもとにありしとき 大菩提心おこせども 自力かなはで流転せり」というご和讃もございますので、仏の「出世のみもと」ですから、正法どころかまさに仏・釈尊在世の時代に生まれ合わせたけれどもだめだったという、そういう側面も、一つ考えておく必要があるのではないかと。これは感想でございます。

先生のご講演を拝聴させていただきまして素人なりに思わせていただいたんですが、たとえば技術というのは、言葉そのものは違ったかもしれませんが、技術は真理の顕現態の一つとハイデガーが述べたと教えていただいたわけですが、ハイデガーの考えですから、これをどうこういっても仕方がないんですが、仏教的に申しますと技術というのは有為という概念に入るのではないかと。我々の計らいの世界ですね。もちろん計らいの世界の中にも一つ方便がありますから、真理の顕現態の一つであると言えなくもないでしょうが、そのあたりがどうなのかなということが一点です。

ハイデガーのところのご紹介にありましたように、技術というものは西洋で始まったものだからその解決も西洋だという意味のことをおっしゃっていただいたかと思いますが、じゃ、東洋には技術はなかったんだらうかということが一つの疑問として湧いてまいります。ルネサンスの3大発明と言われているものも、もともとは

中国であったのだということも言われておりますし、ヨーロッパのやったことは羅針盤にしましても技術というものを戦争に転用したのがヨーロッパの功績だというふうに言われたりすることもあるかと思えます。そういたしますと、東洋、インドにもそういう技術はあったと思われまますし、そのあたりはいかがなのかという疑問点でございます。

阿弥陀仏が衆生の身となるという、何の異論もございませんが、ただ私たちの立場からしますと、それはものの相手そのものになることができるのは、あくまでも仏にしかできない、衆生には不可能なことだと。根底に我執を全く離れた無分別智を根底においているからこそ、そのものになりきることができるのであって、逆に凡夫という我執的な存在は相手の立場に立ったとしても、それはあくまでも表面的なものにすぎないという、同情すると言ってもそれはあくまでも表面的な同情で仏教の慈悲というのはまさしく「同体の大悲」という言い方がされまして、そのものになりきってともに苦しみを苦しむ、悲しみを悲しむという意味がありますが、その同体の大悲が可能なのは、まさしく無分別智を根底としているからこそ、可能なのではないかという、私たちに果たしてどれだけ可能なのかという側面、相手の身になって考えるという側面がないことはないですが、あくまでも表面的なものでしかない。仏がなりきるのに比べると全く表面的なものでしかない。そういう立場が仏教の立場ではないかという気がいたします。それが浅田先生に「これを聞け」と言われましたので「考える」ということと、それから禅定、無念無想の境地ですね、そういうものとの関係はどう考えさせていただいたらいいんだろうかと、いくつかの問題、つまらんことも申し上げたかと思えますが、少し疑問と思いますことをちよっと出させていただきました。

一司会 どうもありがとうございました。祈りのことについて門外漢ではっきりとつかむことができずでしたが、大峯先生からお答えいただけるのでしょうか。

一大峯 いろんなことを聞かれました。最初に祈りの元の意味はどうであったか。これは元の意味といっても具体的に言うと、イエスが十字架上でいろんな祈りの言葉を出しています。「主よ、御心のままになさしめ給え」という祈りがあります。その前には「主よ、なぜ我を見捨て給うや」という言葉もあります。その次が御心のままになさしめ給えという。これはこうしてくれ、ああしてくれではないんですね。「主の思われる通りに」ということですから、自分を捨てているわけですから、「自己放棄」ということが祈りの基本的なこととしてあります。「聖なるものとの内面的交通」、これは、ハイラーの定義でありまして、キリスト教の神学者が言っているものではなく、ハイラーの『ダス・ゲベート (Das Gebet: 祈り)』に書いてある言葉です。その場合の聖なるものとの内面的交通というのは、人間の側からいうと自己放棄だと思えます。自分を捨てる。それでキリスト教ではそういう具合に、私は宗教哲学の見地から言うわけで、教義を言っているわけじゃない。教義が言っていることをロゴス化して論理の言葉で言ったらそうなるということで、どこまでも信仰告

白しているわけじゃないですから。聖なるものと人間の内面的交通、無限者と人間の内面的交通。有限者と有限者との交通ではないんですね。無限者の前に出た時には人間は全くの無力であって、無限に任せる以外にない。任せた状態の表白を、それを「祈り」と呼んできたので、それはあらゆる宗教は、そのように言えるのだと思いますね。

ただ浄土真宗の場合は、祈りを衆生の側から考えないで、如来が祈っている。無限者の祈り、如来の本願は仏の願なので、これは教学的にはいろいろ問題があると思いますが、本願とはどういうことか。凡夫が本願を理解する、本願を信心する、信ずるというそこに凡夫と本願との間に接点がなきゃね。本願があってもそれを受け取るものがなかったら、ないのと一緒ですよ。本願を受け取るというのはどういうことなのか。信心とは何かということが突っ込まれないといけない。「信心は信心」では済まないのであって、親鸞の場合は信知ということがあります、ご和讃に「煩惱具足と信知して」と。知るという根本的な知だという考え方が親鸞にあると思うんですね。善導大師や法然上人でははっきりしていませんが、親鸞の場合、先行者に何かを加えてということがあるとしたら、本願を信じることは如来の智慧に包まれるということ、如来の智慧が如来だけのことでなく、如来の智慧が凡夫に移る。そういうことがないと信は成り立たない。信知という時、はっきりそういう面が、凡夫と如来を区別しているだけでなく、信というのは如来との関係が出てくるということですから、他力の廻向をこちら側に受けるという、受けた時は如来の智慧に照らされているわけですから、如来の智慧が自分の智慧になったと。そういう状態を信と言ったらわかりやすい。何がなんでも信じればいいんだということだから、今はっきりしないんだと思いますね。どうも両方の間に距離が出てきちゃうわけで。本願を信じる時は如来の智慧に目が開くということですね。信を得たということは目が開いたということです。見えない凡夫が如来の力で目が見えた。目が開いたことはこちらの知が如来の独占物ではなく、私のものになったということでない、それは信とは言えないのではないか。その点は親鸞の中でははっきりしていると思います。

ついでですが、衆生のことを考える。考えるというのは衆生のことを言っているのではなくて、仏様と我々の関係の点について言ったわけであって、『歎異抄』（後序）に「五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」とある。案ずるというのは考えるということです。案ずる、考えるということが出ているわけでありまして、『教行信証』でも如来が、なぜ三心を発したかという質問を親鸞は出しています。その答えに「仏意、測りがたし」とまず言って、如来さんの心は凡夫にはわからんと、一応ははっきり言っています。そこで終わっていない。「しかりといへども、ひそかにこの心を推するに」と、もう一歩出ますね。仏さんのことは凡夫にはわからんとまず言って、そこで話が終わらない。「しかりといへども、ひそかにこの心を推するに」と言って、「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今

時に至るまで穢悪汚染にして清浄の心なし」と。これを如来が慈悲心にて如来自身の真実を凡夫に、衆生に廻向したということがありますが、ああいうところでも何か人間が入れないところへ入っていつているという、これが仏教というものだと思います。いくら浄土門でも仏教ですね。もし凡夫が仏さんに何も言えないということだったら交渉はないということですね。「本願」と口で言っているだけであって衆生と本願の間に交流がなかったら、何も始まらない。そういうところに戻って考える。衆生を考えるという時には「衆生の身になって」という、あくまでも如来のことですけれども、しかしそれは思惟の本質です。ものを考えるという時の本質です。如来の五劫思惟は我々がものを考えるという時の考えるべきあり方をはっきりと出しているのであって、我々にそれができないとか、できるという問題ではないですね。それを聞いたら我々はホッとする、衆生の身になって如来が考えてくださったと思うと我々はホッとする。そういう時に我々はその如来の思惟をね、蓮如さんの言葉で言うと、「思案の頂上と申すべきは、弥陀の五劫思惟の本願にすぎたることはなし」「このご思案の道理に同心せば仏に成るべし」と。同心というのは心を同じくするものは仏になる。如来の本願を尊敬しているだけではなく、如来の本願に同心するということは、それが信心だと思う。そういう意味において他の衆生と仏との関係を言っているのではなく、私と阿弥陀さんとの関係のことを考えられるということを使ったわけです。

一 清水 以上、祈りのお話へのお答えですが、どうですか内藤先生。

一 内藤 最初の元々の意味がちょっと私の申し上げることが全くご理解いただけでなかったようで、日本語の祈りという言葉のもともとの意味ということで申し上げたわけで、キリストがどう言おうが基本的に関係のない話でございます。

一 大峯 聖書を翻訳したのは誰か知らないけども、それは英語のプレイヤー(prayer)を祈禱と訳した、全くそれがもともとそういう漢字にあった「祈禱」とか「祈」ということがふさわしいと思ったから訳語になったんでしょうね。不適當な言葉をただ入れたのではないと思います。

一 内藤 『日本古語大辞典』等で見ますと、祈りという言葉に関しては日本からの昔からの意味ではそういう意味があったようには書いていなかったもので、キリスト教の訳語として入ってきた時に、そういう意味が付加されてきたのではないかということをお願いしたわけですね。祈りということは親鸞聖人が使っている祈りをキリスト教で言っていることと重ねて言っていることはいかがかと。

一 司会 祈りという言葉の定義に関しましては棚次先生から専門的なところからご発言願います。

一 棚次 日本語の祈りの意味でございますが、内藤先生のおっしゃった通りのところがございます。西洋語のプレイヤー(prayer)、プリエール(prière)、ゲベート(Gebet)という言葉がもともと願いとか頼みの意味を核心で持っていて、それを日本語に訳す時に祈りという言葉を使ったわけですね。翻訳語としての祈りの意味というの

は請願とか嘆願という意味があると思います。ただ日本語の本来の言葉としての「祈り」の原義は調べてみましても、いろいろ語源の解説はあるんですが、私は祈りを「い」＋「のり」ととらえています。祈りの語構成を「い」＋「のり」ととらえることは、ほぼ諸説一致していると思います。「い」というのは命、息にかかわる言葉、神聖なものという意味がございます。「のり」というのは宣言する、宣べ伝える、宣言するという意味でございまして、そこから考えていきますと「神聖な言葉、生命力溢れる言葉を宣言する」ということがもと祈りの原義ではなかったかと私は考えております。「生命の宣言」と考えております。

—**司会**— そういうことで内藤先生と大峯先生、一致できるような感じもするんですが。

—**内藤**— 『古語大辞典』で「い」は神聖、「のり」は宣。元来、言霊信仰に基づき一種の畏怖感、神の呪言を唱えて幸福を求める意味であったから、古くは神を祈るという使われ方であったと。ただ言霊信仰に連なるところから祈りという言葉が出てきているわけですから、ちょっと本来の日本語の意味と宗教学で祈りとはこういうふうに使うんだということとはズレがあるんじゃないかと感じたので、そういう発言をしました。祈りという言葉を使います時に使われている場面によって意味が違って、特に大事にしないといけないのは宗教というのはあくまでも人々を対象にしたものですから。現代に生きる人々、伝道の立場から考えますと、その時、その人々が祈りという言葉にどういう意味を付与して考えているかということをもと根本的に考えないといけないのではないかということをお願いしたわけなんです。大峯先生のご発言で教学的なことをいろいろ伺いましたが、ただこの学会で真宗教学の狭いところで話をしても始まらないと思いますので、この問題はこれくらいでいいんじゃないですかね。

—**司会**— 何となく問題の所在がそうなのかなと私のようなものでも勘づいたような感じがいたします。大峯先生がおっしゃったことも筋が通っていますが。

—**大峯**— まだ信心に入っていない人が、入ってくるように「念仏の立場で祈らせ候へ」という文章があります。あの場合の祈りはどういう意味になりますか？

—**内藤**— 日本語の意味としては「希望する」という意味があります。少なくともお願い願うという意味で考えるべきではない。なぜならば、親鸞聖人の教義からして、何かを仏に対してお願い願うことはありえないということでもあります。

—**大峯**— その人が念仏に入るように祈らせ候へと。

—**内藤**— 希望するという意味だと。

—**大峯**— 希望するという意味ですか、祈るということは。祈るという言葉はそう使われているんですか？

—**内藤**— 祈りという言葉は両用に。親鸞のように肯定的な表現もあれば否定的な表現もあるということですね。

—**大峯**— 祈りという言葉そのものが悪いということになるんですね。

—内藤 祈りという言葉が、どう受け止められるかということを経道教団という立場から考えないといけないということをし申し上げたわけです。

—大峯 二つの意味があるということをし正しく伝えないと、本当の経道教団にならないですね。

—内藤 希望するということをし少なくとも今、祈るというふうな使われ方はされておりますけれども、その経道教団というのし、あくまでも何を伝えるかということであって、こういう議論をここでも仕方がないと思うんですね。こういう場面でするべきではないと。

—大峯 教団は何も真宗だけではないわけし、あらゆる教団は経道教団でしょう。真宗だけの問題じゃない。

—内藤 あらゆる教団が経道教団かどうかは、なんとも申し上げられないところありますけれども。

—大峯 教団は何のためにあるか。経道教団に決まっている。

—内藤 そうですかね。棚次先生、ご意見、おありですか？

—棚次 非常に白熱した面白い議論になってきたと思ひますが、浄土真宗の伝統的な祈りという言葉の使い方、祈りの解釈というのし、現世利益のための祈りであるから、そういう意味では祈らないということをし謳ってきたわけですね。ところが、大峯先生のようなお立場ですと、浄土真宗の信仰を持ちながら、なおかつ宗教哲学をなさっているわけし、教学の外へ一歩出た時には、祈りという言葉は、それとはまた違った意味でつかまえられてきているという事実が厳然としてござひます。この祈りの言葉の問題に関しても宗教間対話のような場面では、ごく普通の祈りの言葉ということし、その現象をとらえてきているということがありますので、そういう教学の中の議論と教学を超えた議論のかかわりの問題になってくるのだろうと、門外漢ながら考えております。

—司会 そのへんでよろしいでしょうか。大峯先生、内藤先生、あればおっしゃってください構わないのですが。内藤先生が出された問題で4点ほどござひます。正像末、末法の時代については省略してよろしいですか。それから次の問題点として、技術が真理の顕現態である。しかしこれは有為、計らいの世界で言えることではないか。有為、計らいの世界で考えますと、「東洋には技術がなかったということになるのか？」という問いが内藤先生から出ておりますが、この点いかがでしょうか。

—大峯 東洋の技術を問題にしたのはマックス・シェーラーですね。心の技術、ゼーレン・テクニク(Seelen Technik)という概念を出しまして、ヨーロッパの技術は外的自然の支配の手段として技術が考えられてきたが、心、内的テクニクという言葉を使いまして、原始仏教の禅定とか、忍辱とか、無我という概念の中に心の統制というか、心による心の支配ですね。そういうヨーロッパでは知らなかったテクニクがある。そういう意味で、テクニクは普遍的であって東洋にもある。ただ

ヨーロッパの技術が東洋の心的テクニックとどこが違うか。それは精密数学と技術が結びついたところが近代のテクニックの特徴であって、東洋にはそれがなかったといっています。テクニックがヨーロッパ独占のものだという意見ではないわけです。しかしそれ以上にシェーラーは展開していないわけで、東洋の原始仏教が持っていたような心のテクニック、精神性を、西洋の自然科学的な技術によって支配されている世界の問題を解決するのに一つの道になるのではないかという提案はしているんですが、それ以上は突っ込んでいない。それを言っただけであって、技術が人間のあらゆる領域を支配しているという問題に対処する、それは外から持ってくる方法だけではだめだと。

ヨーロッパ人だけが解決できるとは言っていない。ヨーロッパのギリシャ哲学の形而上学の帰結として出てくるテクニックの問題の弊害の解決は、それを生んだヨーロッパの世界を基礎にしないといけないという、それはハイデガーの発想ですが、私はそう思わないので、もちろんそれは東洋の自然の関係、自然観がむしろヨーロッパ人が解決できない道を発見するかもしれない。私の意見はそこがハイデガーとは違うわけです。

一司会 ありがとうございます。大体問題点が明瞭になってきているのではないかと思います。私たち東洋人には東洋人の道があるということでしょうか。最後の内藤先生の問題点、禅定とか無念無想とつながるのかどうかという質問については。

一大峯 禅定という既成の言葉だけで考えるのはどうかと思いますがね。しかしハイデガーのデンケン(Denken)というのは今の科学的思考は皆、計算だと言っているので、デンケンではない、レヒネン(Rechnen)だと。「自然科学は考えない」という言葉さえあるんですね。自然科学でやっているのは計算だけであって考えていない。考えることは計算じゃない。人間のある根本的な態度を言うんだと。感じること、考えが違うという区別のことを言っているのではなく、人間の存在に対する人間の根本的な態度を思惟というわけです。日本語でも「君は考え方を変えなきゃならん」というふうに言う時は根本のことを言っている。考え方が間違っているという時には、特定のものについて言っているのではなく、根本から考え直さないといけない。

「もう一回生まれ変われ」という時に考えるということが出てくる。「お前、感じ直せ」と言わないでしょ。考えるという言葉は、それだけ重い意味を持っているわけで、そういう意味で言えば、信心といっても考え方なんです。常識と全く違う考え方なんです。それはヨーロッパでは思考の限界にトマス・アクィナスなどはつきりしています。知性は限界があって、限界の向こうが信じることだから、信じるということの方が広いんだと「知と信の融和」を図ったわけです。しかし仏教は違うと思います。仏教の場合は、親鸞聖人の場合、「信知」と言ってくる場所に知と信の二元論はない。そこがキリスト教と違うところなのであって、禅定と言ったらいいかどうか知りませんが、意識を超えるということですね、禅定は。意識を脱却して、主観的意識というものの考え方を脱去するということなので、これは考えるという

ことを徹底していったら、——お釈迦様の悟りは信じたんじゃないですよ。「徹底的な内省」ですよ。誰かの言うたことを信じて悟ったんじゃないで、内省です。——自己を徹底的に内省して行って、意識を突破するところまでいったわけですから、考えるということはそういうところまで行くわけですね。本当の思考は禅定も含むという、弥陀の五劫思惟までつながるものだというを言いたいわけです。

一司会 大變的確なご指摘をありがとうございます。内藤先生に再び反論をお願いしたいところですが、時間の関係で、ひとまずこれでよろしいでしょうか。

次に落合先生から問題点、質問点、ご意見などお伺いできればと存じます。

一落合 多少今までの議論とはニュアンスが変わって、「祈りとモダニティ」ということと言えば、モダニティの話題に。大峯先生の講演の中身にかかわる話になると思います。いろんな議論の仕方があって、私の本来のスタンスからすると真正面からぶつけることもできるんですが、それは避けておいて、ハイデガーがモダニティの中心に技術があると。技術というものはハイデガー自身の言葉によれば真理の一つの現象形態、存在史の歴運としての技術。一つの真理の形態ですから避けて通れるものではない。さらにその技術の真理の形態は他のあらゆる真理の形態を覆い隠すという力を持っている。これに対してどうするかということは、ごく狭まれた隘路しか残っていないというお話であります。

モダニティの中心は技術、正確に言うと科学技術、単なる技術はモダニティの中心にはなりません。物理学の背後にはその方法として数学、解析学があるわけですから、解析学や物理学というサイエンスを応用する技術、それを科学技術というのでしょうか、それがモダニティを規定している。その点に関しては全く同じ判断でございます。かつそれを技術はニュートラルだから、よい人間が扱えばよいので、悪い人間が扱えば悪いという単純な話ではないということも全く同感でございます。

科学技術そのものが一つの形而上学として他の思考を支配することも事実でありまして、そこまでは全く同意をするわけでありまして。問題はそこから、さてそこで人間が失われるから人間を回復するにはどうしたらいいかという問いは有効なのか。つまりそこで普通の議論ですと「西では行き詰まったから東があるさ、東洋の仏教を持ち出せば人間は回復できる」という話になるだろうかと。これはいささか楽観的かなと思います。ハイデガーがなぜそれを言わないかということ、ハイデガーはその行く末も見えている。それはもっと軽薄な技術主義になるだろう。日本はそうでしょう。たとえ仏教国であろうと東洋であろうと、科学技術をひとたび自分のものとするれば、ますます軽佻浮薄にならざるをえないんですね。ハイデガー的な意味でのデンケンする人間などというものは、もうどこにもいない。まして日本などにいるわけではないというのが通常の見通しで、ハイデガーはそれをよくわかっていた。東洋の仏教を持ってくればいいと、バカにして言っているんじゃないですよ。ちょっとそれは楽観的にすぎるだろうということが一つのことでございます。

じゃ、どうなのか。何の希望もないのかということところが、ここは宗教倫理学会で、

私も宗教者でございますから、そこで何の希望もありませんよという話をするために、この話をしているわけではないんですね。やはりここで西洋思想の伝統にもう一回戻ってみようと。そうするとフロイトを思い出す。フロイトは面白いことを言っていて、「技術というものは人間が快を得るためにつくっていく。人間というのは技術の中で自分なるべく快感をえるために追求して行って、技術に全部自分が囲まれて、技術そのものの中に溶けだすことによって一番ハッピーになるんだ」と。つまり人間は幸せになる。幸福になる。快感を得られる。しかしながら「これ全体が技術の中で人間が溶けだすこと自体が人間の終焉なんだ。つまり人間自身が終わることだ」という見通しを持っているんですね。彼はそれを技術の方は彼のことですから何でもエロスになってしまうわけで、一種のエロスである、技術自体は。そしてそのエロスの中に取り囲まれて人間が存在し続けるとやがて滅びる。それが彼の言葉で言えばタナトス (thanatos: 死) ということへの願望なんだと。人間は技術を持つ、科学技術文明を持つことは死への行進をしているんだと。本人たちはそれでハッピーなんだ。これがフロイトのラカンを通じての一つの見方ですけど。基本的な見方なわけです。ハイデガーの話もフロイトの話も、ある共通点を持っていると感じられると思うんです。それは何か。「人間は滅びに向かっている」という発想ですね。これは基督教の言葉では「終末論」と言います。エスカトロジー。つまりここで問題になっているのは終末論的な世界観です。

私は終末論がいいとか悪いというという話をしているわけではないんです。宗教の一つのあり方として終末論的な宗教はありうる。これはちょっと仏教とは距離があるかもしれませんが、それは「人は滅びることによってしか救われない」ということを言っているんですよ。非常につづめて言えばね。つまり死への行進、これはもちろん基督教の中で大いに異論を持っている人はいるかと思いますが、終末論に対する一つの理解の仕方として終わりがある。終わりに向かって人々は、歴運でもいいですけど、動いている。科学技術はまさに終わりの最後にふさわしいフィナーレとして人間をとらえる。そのことによってやがて終末が来る。終末ということが実は救いなんだと。これと先程大峯先生がおっしゃっていた、結局、救いというか、可能性、希望というのは終末ということは基督教では希望と言い換えるんですが、希望というのは何か。人間が何かある、何かに役立つということを考えることをやめると。つまり何かをする、何かに役立つという思考そのものをやめて、何かをすると考えるな、何か役立つことをするなど。そういうものと終末はどこが違うのと。これが一つの基本的な疑問で、ここで仏教の話に戻してもいいですけど、仏教は涅槃ということを言うでしょ。ニルヴァーナ。多分、浄土真宗はそれと距離があるのかしれませんが、「仏教が目指していたものは本当に生なんですか。生きることなんですか？」という問いも僕は発したいわけですね。もちろん正統的な教義では「終末から逆に現在の生き方を決断せよ」というのが正しい言い方なんですよ、宗教的には。しかしそうだけれども、終末が問題なんだろうということが、一つの

大きな僕の疑問でもありますし、こういうタイプの話をお聴く時にいつも疑問に思うことで、終末論という考え方とどういふ距離をとっておられるのかというのが根本的な問いですね。

一司会 人間が何かする、役立つという思考をやめようという思考は終末論の一つではないのか、仏教のニルヴァーナは生きることを目指している思想ではないのかという疑問でございました。大峯先生、いかがでしょうか。

一大峯 キリスト教的な終末論とは違うと思うんですね。ハイデガーは、この科学技術という形で出てくる近代はこれまでのヨーロッパの最後の時期だと言ったけれども、かなり続くだろうと。すぐに終わるというのではなく、まだ続く。しかし同時にまた危険というものが本当に極限までなったら危険そのものが救うんだともいう。人間を破壊する危険が、転回するという。技術の本質そのものが一種の揺動性を持っている、そこに転回の可能性がある。それを実現するのに人間に負わされている仕事は何か。それは何かをするとういことではなく、しようとするのを捨てる。その態度を捨てるということで、それを彼は「本質的な思考」と言っているわけですね。ものをあるがままに受け入れるという態度ですね。それが思考であって「ヨーロッパはすでにそういう技術の本質の転回の影の中に立っているかもしれない」という言い方をしていますから、希望を残しているんですね。終末論ではないと思いますね。

一落合 それがまさに終末論のわけで、終末というのは希望のわけです。ハイデガーに即して言うと、今、先生がおっしゃったハイデガーは戦後のハイデガーですね。彼の主著『存在と時間』を思い出してほしいんですけど、そこでは最も正確にはブルトマンとの関係でシュバイツァーの終末論との関係で見ることが哲学史的には正確だと思うんです。『存在と時間』の中で書かれた終末論は世俗化された終末論のわけですよ。死を前にした人間がどのように現在を決断するのかという話を書いてある。つまりハイデガーというのは実は隠れた終末論を若い頃にやっている。1926年に。それが完全に戦後払拭されているのか。それは『存在と時間』とハイデガーの戦後との関係という問題でもあるんですが、これを私はハイデガー研究者はハイデガーに関して「ハイデガーのニヒリズムをよく分かっていない」ということを言いたい。ハイデガーが語らないことは彼は本当に分からないんじゃないんです。よく分かっていて、滅びると思っていて語らない、それが僕の理解なんですけどね。

一大峯 『存在と時間』のハイデガーは死が解決できてないんですね。重苦しく死への覚悟とか良心とかしんどいんですね、あの思想は。死が重苦しいですよ。『存在と時間』でのハイデガーは。後期になってくるともっと大きなザインに自分を放下する。ザインに任せるといふか、ラッセンが出てきます。死の問題であることは共通しているんですが、戦前も戦後も。死に対する態度が大きくいえば自力的ですよ。『存在と時間』は覚悟だからね。決断とか。後期には決断はないですね。決断はいらない。なす立場ではだめなので、それは他力という概念を拡大していったら、

他力ということは真宗の教義の中に出てきた言葉だけれども、もっと人間存在の、真宗の人であろうとなかろうと、これが将来の人間の生き方、死に方の根本の言葉として使えるというか。広くいえば、他力的になっているということは思想が明るくなっていますね。

一司会 後期のハイデガーで言いますと、世界を4つの要素で考えている。その中の人間というものをどうとらえているか。ディー・シュテルプリッヒェン(Die Sterblichen)、死すべきものと訳すよりは「死をよくするもの、死ぬことができるもの」というふうに訳した方がよいと解釈されています。そういうことも含めると、後期のハイデガーは、これは明らかにエスカトロジ的な要素を背後に後退させて秘めさせている状態ではないか。しかし完全にはなくなっていない状態ではないかと思いますが。

一落合 終末論というのは必ずしも死を否定的にとらえているわけではないんです。希望のわけですから。終末はお終いだからいやだということではなく、終わるから希望があるという話なのです。

一司会 ハイデガーの後期のザインズゲシヒテはまさしくそういう構造を持っていると思います。大変力強い論点を提出していただきましてありがとうございました。

棚次先生からお願いいたします。

一棚次 今日は大峯先生のお話を拝聴いたしまして、久しぶりに京大の学生時代を思い出しました。30年以上前です。京大の授業の雰囲気はこういう雰囲気であったなあと、懐かしい思いをいたしました。私にとっては大峯先生のお話を拝聴させていただくだけでも十分ですが、これから申し上げることは余計なこと、蛇足だと思います。

私は祈りというものをできたら宗教の枠の中に入れない、宗教だけの占有物にしないのがいいのではないかと考えております。ということは人間であれば誰しも祈るのだ。人間の自然本性として祈りをつかまえることができないかというふう从前から思っておりまして、日本語の「生命の宣言」というところから解釈しましても、祈るということと、生きるということが息をして生きるということが根底でつながっているのではないかと考えております。祈ることは生命というものを根源から生きることだという言い方ができるのではないかと考えております。

人間の自然本性から離れて宗教経験ということからいたしましても、この学会の趣旨説明で宗教の原点として祈りをつかまえています。宗教経験の本質は絶対的なものとの統一ということにあるのだらうと思います。これから改めて統一することではなく、統一していることに目覚める、気がつくということですね。これが目覚めであり、救われであると私は理解しております。

内藤先生のお話にもございましたが、ものを考えることに関して相手の身になる、ものになって考えるということは、凡夫には難しいのではないか。そういうことは

無分別智にたって初めて可能なことだとおっしゃっていました。これはその通りだと思のですが、私は「じゃ、人間というのは果して凡夫なのか？」という問いを出したいと思います。凡夫である限りは、仏は一切わからないですね。凡夫がどんなに逆立ちしても凡夫は凡夫でしかありません。ところがその凡夫が仏によって救われたと気づくことは、これはすでに凡夫ではないという認識になるのではないかと思います。そうすると人間存在を凡夫だと否定してかかるのは一つの間人理解のパターンではあるけれども、それとは別の人間理解もありうるのではないかと考えております。祈りの定義に関しまして、無限と人間との交流ということが出てきましたが、その言葉で言いますと、仮に人間を有限だと規定すると、無限と有限のかかわり、それが人間なのではないかというふうに考えてもいいのではないかと思います。これはおそらく従来の議論からすると、ちょっと逸脱した議論とお叱りを受ける可能性があるんですが、私はどうもそういうことでしか考えられないようになってきました。いろんなことを考え、自分の経験からしても、どうもそんなふうになるのではないかと。そうしますと無分別智というのは人間が多分、持ちうるものだと思います。というか、それを本来持っているのではないかと。ところが自我の働きになってそこから一旦離れてしまった状態が常態化した、習慣化したということですから、それをもう一回自我の枠組みを解放すると、そういう無分別智というものに立ちうるのではないかと。本来、宗教とか哲学というのは知というものに関して、二重の智、分別の智、論証的な智とそれ以外の無分別智、直観智と言いますか、そういう二重の智があるのだということを伝統的に宗教は継承してきているのではないかという気がします。それが一点です。

もう一つは技術の問題に関しまして、ヤスパースとハイデガーの技術論のことを大峯先生がお話されました。落合先生も科学技術の問題を話されましたが、技術というものをもう一回、とらえ直すことが必要ではないか。つまり近代というモダニティというのが、特に科学技術が根幹にあって、その支配を受けている社会である。そこから逃れようとしても逃れられない。技術に取り巻かれて支配されて滅亡へと進んでいく。それが落合先生流、フロイト流に言うところの一種の希望になるということですが、技術ということをもう一回、ハイデガーの意味になるかどうかわかりませんが、考え直す必要があるのではないかと。もっと別のテクネーがあるのではないかと。と申しますのも、21世紀というのは宗教と科学技術、科学が連携する時代であり統合する時代であると思います。そうなる初めて人間とか自然とか世界に対する知が総合的な知になりうると思うんです。そういう場面になったとき、従来通りの技術観でもって宗教と提携できるかということ、これは難しいと思います。全く異なった発想に立った技術のとらえ方が考え直されてしかるべきではないか。そういうことを思いました。

一司会 ありがとうございます。論点は二つございまして、一つは無分別智の問題から人間はただの凡夫なのか、むしろ人間は有限と無限のかかわりからなってい

るのではないか。それがただ自我の働きによって引き離されているのではないか。二重の智を考えるべきではないかというのが一つの論点でございました。もう一つは技術のとらえ直しが必要である。別のテクネーの可能性を考えなければいけない。技術の支配による滅亡を終末論的に予感するだけではいけないのではないか。つまり今日、望まれているのは宗教と科学の連携と統合である。そのためには別の発想が必要である。以上の2点でございます。

一大峯 伺いたいのですが、どういう発想があるのか。ヤスパースとかベルグソンとかシェーラーのような考えはちょっと楽天的すぎる。その後の技術の発展を知らない時期に書いた、ヤスパースは戦後ですが、なお理性主義に立っているから人間の主導権をもう一回回復せよという。シェーラーはちょっとハイデガーと似ているところがある。科学技術の根本に意志がある。支配の意志が根本にある。ヤスパースはただの手段だと。理性が使う手段が技術だということですけど。シェーラーはハイデガーとそこが共通しております、知識社会学を展開して、科学技術が出てきた根本にはヨーロッパの市民社会のエトスがあるという。だから数学を技術と結びつけたものは今までは数学が応用されたものが技術だと考えていましたね。数学的自然科学を応用したものが技術だと。ところかシェーラーはそうではなく数学そのものの中に自然支配があるんだと。意志は技術によって初めて出てきたのではなく、数学という考え方の中にヨーロッパの社会においては特に近世のデカルトあたりの数学の考え方には意志を持っていて、数学が自然科学に結びつくのは偶然ではなく当然なんだという考えですね。ハイデガーと意志という点では一緒なんですけど。どこかまだ二人の思想家は楽天的すぎます。世の中を見渡すと恐ろしい感じになりますよね、技術の支配が。インターネットの殺人が行われているという現実を見ると、なんかインターネットが殺人をするわけですね。悪でも善でもないヤスパースは言っているけれども、そんな呑気をことを言っておれないので、そこに技術の支配の不気味さがあるということを思いますと、ハイデガーの考え方が一番僕には近いんですね。ヨーロッパ人の中で解決していくんだという、ハイデガーが言っているラッセン、放下というのはむしろ東洋的な考え方ですね。仏教と結びつくことを拒否していますけどね。しかし彼が言っていることは仏教みたいなことを言っているわけです。放下、ラッセンということ。彼もヨーロッパ人だけで解決すると言っていないで、ハイデガー以外の人を考えないようなことを言っているわけです。ラッセンということはシェーラーからもヤスパースからも出てこない。彼は東洋の知識を得てそんなことを言っているのではなく、はからずも、そういう次元に出ていると思うんですね。名号論を書いた時、ハイデガーの言語論がずいぶん役立って、ハイデガーは浄土真宗のことは何も知らないですが、言語を何かを徹底的に考えていたら偉い人は同じところに行くんだという感想を持ちましたですね。

凡夫のことですが、そういう考えです、私も。凡夫も如来に照らされていないと凡夫とは言えない。凡夫の自覚なんて自己意識で凡夫といっても、ウソっぱちな

でね、私は凡夫だという時には如来に照らされているのでね。ただ凡夫じゃないですよ。浅原佐市という人が言っていますが、「迷いが迷いによるのと、迷いが悟りによるのと違うんだ」と。迷うが迷いによるだけではだめなんで、迷っているながら、どこか救われているという、そういう意味において凡夫と如来を分けているのは仏法ではないと思いますね。

— 棚次 そうしますと凡夫が凡夫であるとわかっている存在は凡夫ではないと？

— 大峯 自覚があればね。その自覚は自己意識で出てこないです。

— 棚次 それをもう一つ突っ込んで仏と言ってはだめですか？

— 大峯 何を、ですか？

— 棚次 自分を。そのような凡夫の自覚に至っている人間。

— 大峯 そこは一足飛びにはいかんと思うんですね。

— 棚次 一足飛びにはいかないと思いますが、仏教は本来、人間に仏性が内在しているのを認めるのがベースだと思っていますが。

— 大峯 そうですが、悉有仏性という思想は浄土真宗の概念に当てはめたら他力廻向ということですね。三心がすでに如来によって廻向されていると。自分は気づかないけども。それは聖道が「悉有仏性」と言ったのと似ていますね。似ているところはあと思う。それは廻向されていることを知らないわけです。それに気づくことが信ということだけれども、それが、信か成仏かとなると、これはちょっとね、一足飛びにはいないだろうと思いますね。

— 棚次 「無限と有限の関係」が人間であって、それを説明するのに有限の側に立って説明することも可能だし、無限の側に身をおいて説明することも可能ではないかなと。

— 大峯 でも他力廻向という思想は無限から説明していくわけですよ。他力廻向は向こうの立場に立っているわけで、廻向されているから立てるんですね。

— 司会 どうもありがとうございました。3人の先生から気づかれた点とか、これだけはということをお願いしたいんですが。

— 内藤 凡夫とわかれば凡夫じゃないという発言がありましたけど、少なくとも凡夫とわかって「私は凡夫だ」と言っているのに「あれは凡夫ではない」という説明を付け加えるのはあまりよくないように思いますね。私は凡夫だというのがまさしくそういう宗教体験としての一つの言葉ですから。それは実は凡夫じゃないんだと説明してしまうと、私は凡夫だという言葉の重みがなくなってしまうように思います。

— 大峯 凡夫の自覚ということは凡夫でなくなったということではないです。どこまで凡夫ですよ。

— 内藤 凡夫でなくなったと棚次先生がおっしゃったのでね。

— 棚次 凡夫の自覚に至った限りにおいて、それは凡夫ではない。ただ凡夫性は相変わらず持っている。だからこれが「無限と有限の関わり」ということの意味でご

ざいます。

—大峯 凡夫だと口だけで言っているだけでね。

—棚次 凡夫である限りは凡夫だとわからないと思います。

—大峯 昔から「機法一体」とか、機の深信と法の深信が一つだと言われている時に、そういう消息があるので、救われるということと流転している自己だということとは同時にわかるので、はじめは流転していることがわかっておって、その次に救われるとわかったという関係じゃないでしょ。凡夫の自覚ということは限りなく凡夫で、凡夫であることをやめたわけではない。凡夫であることをやめたわけじゃないけど、そこは難しいけども、凡夫にわからないはずの自覚が、そこに如来の力によってね、起こるわけですね。起こるんだもん、しょうがないじゃないですか。不思議というより、他力不思議というのはそれを言うので、凡夫にどうして凡夫であることがわかるのかと。わからんのが凡夫じゃないかと言うけども、わかる人はいるんだもの。それでなかったら信仰は成り立たないでしょう。信心は成り立たないでしょう。そうでないと浄土真宗はウソだということになりますよ。そうじゃない、それは厳然たる事実ですよ。凡夫であることをやめたわけじゃない、少なくとも凡夫なんだけど、けどもその凡夫が凡夫であっていいということですね。凡夫であっていいということは救われているということですよ。

—司会 内藤先生もそのへんでご納得くださいますでしょうか。それでは落合先生、最後に一言。棚次先生、何かございませんか。

—棚次 モダニティに関してですが、いろんな考え方は可能ですが、モダニティという概念を現代との絡みでどうつかまえるか。モダニティの連続、延長線上で現代をつかまえる。たとえばアンソニー・ギデンズのハイ・モダニズムの考え方はそれですよ。特に近代、再帰的な近代ということを行っていますけど。それともう一方のモダニティのとらえ方は、現代をモダニティと断絶しているという、ポスト・モダニティのつかまえ方がありますね。3つ目は、モダニティ概念そのものを外からとらえていく。枠の中でつかまえていくと、ミイラとりがミイラになってしまうところがありますから、それをも相対化してつかまえる視点が可能だと思います。私がとりたいというのは3つ目の視点であります。

—司会 パネリストの先生方から一言ずつお聞きしました。フロアの皆様からパネリストの皆様、大峯先生にご質問がありましたら。よろしいでしょうか。それでは今日はこれで終了とさせていただきます。どうも皆様ありがとうございました。パネリストの皆様ありがとうございました。講演者の大峯先生、ありがとうございました。

(了)

2007年度 公開講演会

2008年3月8日（土）14時～16時
於 龍谷大学大宮学舎 清和館

講 師： 村上 和雄

筑波大学名誉教授、国際科学振興財団バイオ研究所所長

講 題： 祈りと遺伝子

コメンテーター： 早島 理 滋賀医科大学教授
澤井 義次 天理大学教授

司 会： 清水 大介 花園大学教授
井上 善幸 龍谷大学准教授

祈りと遺伝子

村上和雄（(財) 国際科学振興財団バイオ研究所所長
筑波大学名誉教授）

－司会(井上) ただいまより宗教倫理学会公開講演会を始めたいと思います。最初に宗教倫理学会会長徳永道雄先生よりご挨拶をいただきます。

－徳永 皆さん、こんにちは。宗教倫理学会は「祈りとモダニティ——宗教から現代を考える」を共通テーマに置きまして、この2年間、研究を続けてまいりましたが、今回の公開講演会では筑波大学名誉教授の村上和雄先生をお招きして「祈りと遺伝子」という講題でご講演をいただくことになりました。先生のご経歴は私が申し上げるまでもなく著名な科学者でいらっしゃるしまして、詳細はプロフィールに記載の通りでございます。ご講演の後、質疑応答の時間もございますので、よろしくお願いいいたします。それでは司会者にバトンタッチをいたします。

－司会 それでは村上先生、よろしくお願いいいたします。

－村上 皆さん、こんにちは。宗教倫理学会にお招きいただきまして話をする機会を得たことを大変うれしく思っております。私のテーマは「祈りと遺伝子」という非常に大きな、野心的というか、冒険的なテーマなんです。正確には、祈りと遺伝子の研究をこれから始めたいという、そういう意味で、このテーマをつけさせていただきました。実は今年4月に棚次先生と共著で本を出版する予定にしております。学術向けではなく一般向けです。私どもが祈りと遺伝子のことをこれからやっていきたいという宣言するような本になると思っております。

なぜ私が、祈りと遺伝子の研究をやろうとしているかということからお話をさせていただきます。実は私どもは最近、笑うネズミをつくれたというふうに思っております。この研究の発端になりましたのが、今から3年くらい前、インドの北にダラムサラというところがありまして、ダライ・ラマ法王のレジデンスがあるところですが、ここで仏教徒と科学者が対話をするところがありました。ダライ・ラマはおそらく十数年にわたって毎年、仏教と科学者の対話というのを開催しておりまして彼は主催者です。1週間、午前中に科学者がレクチャーをやって、午後、彼を交えてディスカッションする。1週間、彼は全然、中座をしないということで、おそらく宗教者で、科学者とまともに対話をしているのは私の知っている限り、彼だけで

はないか。私はそこに呼ばれまして、仏教者と科学者の対話をやってきました。その時にリチャード・ギアに会いました。有名なハリウッドスターです。彼がなんで仏教者と科学者の対話にいるのか不思議なんです。ダラムサラというところは遊ぶところがないところで、皆で一緒に夜は食事の後、お酒を飲みながらいろんな話をしていました。

その時に欧米の学者が「ネズミがどうも笑うらしいで」「えっ、ネズミが笑うんですか?」ということで、そこから私どもの研究が始まっております。笑うネズミをどうしてつくるか。ネズミと仲良くなる。ネズミが気を許して手を出すと登ってきます。それを後ろに引っ繰り返して、このへんをチョコチョコとこそばすんです。するとネズミが「気持ちがいい」とネズミ語でしゃべるんです。人間には聞こえない500KHZという音を出すんです。ネズミの気持ちが悪いという時の声が200KHZです。これを計ることによって、「気持ちいい」と言っているか「気持ち悪い」と言っているかを推測できる。この500KHZの声は人間には聞こえないのですが、哺乳動物の快感、気持ちいいというか、それが笑いの原型であるとなっておりますので、笑うネズミがネズミ年にできました。これができることによって笑いの研究は飛躍的に伸びていくと期待しております。

この研究をやるにはもう一つ元がありまして、私は4、5年前から「笑い与健康」ということで実験をしております。人生は不思議な時に不思議なことが起こるのでありますが、吉本興業と組んでやっております時、私どもと吉本との出会いは偶然ではないなと思いたちました。なぜか。私は「科学は知的なエンターテインメントである」と言ってきました。吉本興業のエンターテインメントは知的かどうかについてはコメントをしません、科学にも面白いところがないと続かないんですね。人間にとってわからないことが、わかるというのは大きな楽しみであります。科学をやっていてありがたいことは、一生に何度か「このことは私どもが世界で最初に見つけた」という瞬間があります。この時の喜びと感動はちょっと表現のしようがない。飛び上がりたいような喜び、晩はうれしくて寝られない。科学にはこういうワクワク、ドキドキがあります。これは十分エンターテインメントになるはずなんです。そういうことで吉本と組んで毎年のようにジョイントイベントをやっています。

吉本と組んで何をめざすか。「笑いがどの遺伝子のスイッチをオンにするか、オフにするか」という実験をやっています。遺伝子のスイッチのオンとオフというのは今日の主題の一つになりますが、遺伝子には一種のスイッチがあると考えてください。オンとは何か。遺伝子が働く。オフは遺伝子が働かない。ヒトのゲノム、ヒトの全遺伝子暗号が解読されました。そこでわかってきた面白いことの一つは、全DNA本体で本当に働いていることがはっきりしているのは2%内外であるということです。2%以外、後の98%のDNAは何をしているか。さっぱりわからない。さぼっているのか、寝ているのか、将来のために備えているのか。寝ているいいDNAのスイッチをオンにして、起きている病気の悪い遺伝子をオフにすることがで

できれば、私どもの可能性は何倍にもなる。「ひょっとしたら大化けするで」ということが科学の言葉で語られようとしている、これは大変エキサイティングなことですね。私どもは笑いによって、どの遺伝子にスイッチが入るかという研究を開始しました。

二つのグループに分けて、一つは若い学生たち、一つは糖尿病患者さんです。この実験を2日に分けます。前日と当日に。前日は20数名のボランティアの糖尿病患者さんたちに大学病院に集まってもらいまして軽い昼食をとっていただきます。昼食の直後に大学の先生の講義を聴いてもらいます。「糖尿病のメカニズムについて」という講義です。大学の先生の講義は一般には面白くなく、ユーモアもないわけです。特に下手な講義をお願いしたわけではなく、「いつも通りの講義を40分やってください」と。40分聴いて血糖値を計りました。講義の直後と食前に一回計っておいて、その前後を比較しました。なんと「糖尿病のメカニズム」の講義を聴いた後では平均血糖値は123mg上がりました。123mg、これは私どもの予想を超えました。血糖値の高い方は、なるべくつまらん先生の話をお聴かない方が身体のためにいいということですが、これが前日です。

当日は前日と同じ時間に同じ人に漫才を聴いてもらったんです。違いは、前日は講義、当日は漫才。当日はサクラを大量に集めました。つくばの市民ホールを借り切りまして1000名の方が集まりました。「笑いと言伝子の公開実験」ということで、吉本からB&Bを送ってくれました。今、島田洋七さんという人が、「ガバイばあちゃん」で有名です。B&Bが登場する舞台の袖におりまして、私は彼に出演寸前に少し耳打ちをしました。「もしこの実験が成功したら間違いなく糖尿病研究の歴史に残りますからね。笑いと言伝子、笑いと言伝子の研究はまだ誰もやっていない」。B&Bは気合が入っておいりました。皆さん、非常によく笑いました。血糖値を計りました。前日、同じ人が同じ時間に講義の後に123mg上がった血糖値が、漫才終わったら77mgしか上がらなかった。講義と漫才の差は123-77で46mgの差が出ました。46mg。糖尿病の専門医の医者目の色が変わりました。「俺たちは今まで何をやってきたのだ。笑いだけでこんなに血糖値に効果がある」。

最初、この実験を私が糖尿病の専門医に相談に行きますと、多くのお医者さんは「そんなアホみたいな実験はまともな医者にはしません」とおっしゃっていました。このデータを見て医者態度が変わりました。これは面白くなってきた。すぐ発表しましょうというので、その論文はすぐにアメリカの有名な糖尿病学会誌に掲載されました。笑いだけで糖尿病患者さんの食後の血糖値の上昇が抑えられる。このニュースをロイター通信が採り上げてくれまして世界各国にばら蒔いてくれました。私どもの研究は少し海外からも注目され始めました。この研究が進んでいきますと、薬の代わりに笑いに手を出すような医療機関があるかもしれない。ひょっとしたら医療の質を変えていけるかもわからない。今の医療は非常に高度な医療です。しかし、あれは患者さんの側から見ますと、あまり快くないことが多いですね。手術な

んで、誰だってしたくない。私は薬もあまり飲みすぎない方がいいと思っております。本日はおそらく薬の関係者がおられませんので言いやすいのですが、私の友人で薬屋の社長がおりますが、彼はほとんど薬を飲みません。なぜか。薬には副作用があることを、その人はよく知っているわけです。私は副作用のない薬はないと思っております。今、アメリカでは年間最低10万人の人が薬の副作用にかかっているということが医学の雑誌にちゃんと報告されています。もちろん薬は効くんですけど副作用がある。しかし笑いには副作用がないと思われま。笑い転げて死んだという人は今まで聞いたことがない。おなか痛くなるとか、たまに顎が外れるという人がいますが、これは副作用のない薬になるかもしれない。私どもは毎年4回実験をやっておりますが、いずれも血糖値が下がります。これは行けると思っております。

そして笑いを誘うDVDをつくりまして、「笑い療法、笑いセラピー」を医療の現場に持ち込みたいと思っております。そういうことで私は笑いにだんだんはまりだしまして「日本笑い学会」に入っております。日本笑い学会、興味のある方はホームページを開いてみてください。「笑いに興味のある方は誰でも入れます」と書いてありまして「年齢、学歴は一切問いません。容姿も問わず」とあります。ふざけた学会だなと思ったら、これが真面目な学会なんです。1000名を超える会員が笑いの実践と研究に励んでおられます。たとえば群馬のある脳神経外科の院長先生は週末になると院長寄席を病院でやります。病院で院長が羽織袴を着て、桂何とかという芸名を持って寄席をやっている。笑い学会に入って知ったことは「笑いとは決して笑いごとではない」ということです。どの民族の神話にも笑いがあるらしい。ということは神さんや仏さんも笑いを知っておられた。その証拠にもバイブルにもコーランにも仏典にも笑いが出てくるらしい。世界の有名な哲学者も科学者もダーウィンにしても笑いの研究をしていた。ソクラテス、プラトン、アリストテレス、カント、フロイド、こういう有名な学者も哲学者も笑いの研究をしているということが残っている。笑いを研究していくと、「人間とは何か」ということを突き止める有力な手段になるかもわからない。

私が笑い学会で注目したのは胎児も笑うということです。確かにスライドを見せられると胎児が笑っているような顔をしているんですね。ただし私は少し疑問を持っています。「胎児に面白いか、聞いたんですか？」って。しかし少なくとも笑っている顔をしている。生まれたての赤ちゃんがニッコリ笑いますね。あれは笑いというより smile ですね。Angel Smile、天使の微笑み。赤ちゃんは親に世話になりっぱなしですね。give するものがない。あの smile は親に周りの人に喜びと幸せを与えていると思われま。しかしあの smile は親が生まれたての赤ちゃんに教えたわけではないんですよ。smile しなさいというのではない、自然に smile が出る。赤ちゃんは smile する能力を持ってこの世に誕生してきたということです。私どもの言葉で言えば、笑いの関連する遺伝子があるということです。それを見つけよ

うと過去3年間くらい、私どもは頑張りました。4万個の人の遺伝子を調べました。どの遺伝子が笑いによってオンになるか、どの遺伝子がオフかということをやりました、第一弾の結果が出ました。笑いによってオンになる遺伝子、オフになる遺伝子がわかった。今年3月末、私どものグループリーダーは「笑い遺伝子」で博士号をとります。「笑い遺伝子」で博士号をとるのはおそらく世界で最初であります。

遺伝子の暗号解読、遺伝子の研究を25年以上やってきて、そこで私が「どうも間違いないな」と思い出したことは「心を変えたら遺伝子の働きも変わるんじゃないか」。心を変えても遺伝子暗号は変わらないと思いますが、遺伝子のオンとオフが変わる。オンとオフが変わるということは遺伝子の働きが変わるということです。心を変えたら遺伝子の働きが変わる。そこで私の仮説は簡単で、「陽気な心、楽しい、うれしい、喜び、感動、感謝、そして深い祈り」までもが、遺伝子のスイッチ・オンをして、「陰気な心、悩み、不安、恐怖、いじめ」、こういうものは悪い遺伝子のスイッチ・オンにすると考えております。これをこれから私どもは解明していきたいと「心と遺伝子研究会」をつくっております、4年を過ぎましたが、私が代表を務めております。これを医学と宗教を結びつけるような研究に発展させたいと考えているわけです。

……〔中略〕（27歳の時に渡米し、苦勞の末に助教授となるも、大学の厳しさが身に滲みる。帰国後、高血圧の黒幕といわれる酵素レニンの遺伝子解読に取り組み、圧倒的に形勢不利の中、ハイデルベルクの酒場でたまたま京大教授に出会う。そこで、全面的に応援しようとの約束を得た。）……

不思議なことが二つ起こりました。ドイツのある酒場で偶然に有名な先生に会うというチャンスはめちゃくちゃ低い、一生にあるかないかのことです。もう一つ不思議なことは「助けてやろう」と。人の足を引っ張ってやろうというのは結構ありますが、「助けてやろう」なんて滅多にない。「これは勝てるかもわからんな」と思いだしました。なぜか。

科学には2面性がある。普通にやっている科学は昼間科学と言っている。Day Science、昼間科学は客観性の世界、論理の世界、理性の世界。ロゴスの世界です。ところが実は科学はもう一面、夜の科学というのがあるんですね。Night Science。客観性よりも主観なんです。証拠はないんです。しかしこれは「必ずこうなりますよ、ならして見せますよ」という科学者の熱い思い、パッションが必要なんです。夜の科学は理性と違って感性、直観、インスピレーションがあるわけです。昼間は理屈にあうようなことだけ言いますが、大発見は、ほぼ間違いなくNight Scienceから出ている。なぜかという大きな仕事はどこか常識を超えないとだめなんです。

常識を超える時は理性ではないんです。「これは行ける」という科学者の勘なんです。この前、物理の小柴先生に会いました。「物理もヤマ勘やったな」とおっしゃいました。ヤマ勘だけではノーベル賞はとれませんが、科学者を動かしているパッション、動機は必ずしも科学的ではない。

私は「天の味方がついた」と感じました。なぜ天の味方がついたか。できの悪い私どもが一生懸命やっている姿を天から見られたと私は感じたんですね。私どもには、生まれて間もない我が大学、世界にまだほとんど名を知られていない大学を世界の一流大学にしたいという大きな夢がありました。そのために江崎礼於奈という、アメリカに30年もIBMにいた人を学長に就任させたんですね。学長だけは世界に通用する。あとはどうするか。いい学生を卒業させる。いい研究をするということです。私どもの研究室に「3年以内に我がチームから世界に通用する研究を出す」というスローガンを掲げていました。そういう熱い思いがあった。もう一つ、私どもの研究は、高血圧の現状を突き止めることに役立つ。世界中に何億人という高血圧で困っている方がおられる。こういう人たちに役立つ研究ができると燃えたんです。この健気な姿を天が見られたと私は直観するんです。

そこで私は変身します。それまでは「ハーバードとパスツールか、到底かなわん」と思っていました。それは地上世界の話です。天の目からすれば「ハーバードが何だ」と急に偉くなりました。私は日本に飛んで帰りました。そこから、私どもはヒトのレニン遺伝子を捕まえて、全遺伝子暗号解読に世界に最初に成功する。感動しました。9回裏逆転満塁ホームランです。当時の実力を正確に比較しますと、ハーバードやパスツールは天下の横綱なんです。私どものチームは前頭のかなり下の方です。10番実力勝負をやれば9番確実に負ける。しかし私どもの研究人生も幾度が勝負をかけて、天の味方がついた。最後に遺伝子暗号解読をやったのは、25、26歳の大学院の学生だったんです。最後は皆、下宿に帰らないで、安物の寝袋を買ってきて、研究室に寝泊まりをしました。なぜそんなことになったか。遺伝子が捕まったんです。遺伝子が捕まったということはゴールがはっきり見えました。あとは時間勝負なんです。最後は皆、睡眠時間を削った。血沸き肉踊る。なぜかという毎日、毎日、新しい世界で、誰も知らないデータを見ている。これは感動です。そしてこれができれば我が弱小チームは世界のトップグループに入れるかもわからん。こんなラッキーなことは人生に、そう何度もないんですね。こういう環境があると普通の学生が変身するんです。

「感動が遺伝子のスイッチをオンにする」と言っていますが、それはこの時の体験にもよります。しかしこんなカッコいい話ばかりでなく、負けたことの方がずっと多いんですが、負けたことは時間の関係で省略いたします。そして私は大学を辞めてから、イネの遺伝子暗号解読という大きなプロジェクトに入っていきます。これは大変でした。イネの全遺伝子暗号を解読する。相手はまたアメリカの強力なベンチャーでした。大学を辞めていますから予算をとってくる、場所を借りる、人を

集めてくる、非常にピンチに陥りました。何度か我がチームは解散かというところに追い込まれました。本には「ピンチはチャンスです」と書いていますが、あれは書くのは簡単ですが、追い込まれた時に本当にチャンスになるか。やっぱりイネだったからだと思います。イネは日本の食だけではなく、稲作は日本の文化を形成してきたものですよね。文化の遺伝子です。それを「外国ごときに読まれてたまるか。日の丸を背負ってやろう」という気になるんですね。日本はイネの遺伝子を解読では、断然世界の単独トップなんですね。これは稲の力だと思っています。私どものチームだけでも全イネの遺伝子暗号の約半数16000個の遺伝子を解読したんです。

しかし私は遺伝子暗号を読んでいる時にだいぶ前から不思議なことに気がついておりました。読む技術も確かにすごいんですよ、万巻の書物に匹敵する情報を、狭い、狭いところに書いてある情報を読む技術もすごいんですが、もっとももっとすごいことがあると私は気がついておりました。それは「読む前に書いてあった」ということです。書いてあったから読めるわけです。書いた人と読む人はどっちが偉いかというと、書いた人の方が偉いはずですね。ヒトの遺伝子暗号を、イネの遺伝子暗号を書いたのは誰か。人間ではない。しかしでたらめであるわけがない。人の身体的设计図、イネ的设计図をでたらめに書けるわけがない。今、ヒトの遺伝子暗号は全部入ったワンフルセットをゲノムと言っています。私どもお父さんから1ゲノム、お母さんから1ゲノムをもらいます。それが細胞の中の核の中に全部1セットずつ入っています。それを4、5年前に読んだら、約32億の科学の文字からなっている。それは1冊1000ページの本が3200冊分の情報です。3200冊の大百科事典を親から1セットずつもらいます。それが細胞の中の核の中に入っているんですよ。どれくらい小さなところに入っているか、想像してみてください。1gの2000億分の1です。アンビリャブルですね。1gの2000億分の1という超狭い空間に満貫の書物が書き込んである事実、それが間違いなく、休みなく働いている。

これをやっているのは誰か。人間ではない。誰かわからない。しかしこれは自然がやっているとしか言えない。私どものよく知っている自然は太陽とか水とか空気とか、地球とか。そんなものが人の遺伝子暗号を克明に書きこめるわけがない。そこで私には自然には二つあるのではないかと思いだしました。「目に見える自然」と「目に見えないけれども、すべての生き物の遺伝子暗号を書き込んで今、それを間違いなく、休みなく動かしている自然」の不思議な力があるのではないか。

私は本当に大切なものは目に見えないんじゃないかと思います。心が目に見えない。生命が目に見えない。すべての生き物を動かしている暗号を書いているものは目に見えない。今、私ども日本人は一般に目に見えるものの価値、計測できるものに価値を置いていますが、本当に価値のあるものは目に見えない。金子みすずさんという人の詩が好きなんですけど、彼女の詩の中に「見えないものでもあるんだよ。

見えないけれどもあるんだよ」。昼の星は目に見えない。目に見えない不思議な働きを十数年前から **Something Great** という言葉を使っています。**Something** ですから今の科学ではわからない。しかし **Great** な働きがなければ生きていけない。**Something Great** とは何か。これはおそらく人類の永遠の課題ではないか。科学者は科学者なりに **Something Great** は何かということを追いかけていくと思います。

しかし **Something Great** は何かと聞かれた時に定義をする必要がある。私の今の定義は非常に簡単なんです。私には両親がありました。両親には両親がありました。間違いないです。子どもは親なしでは生まれてくるはずがない。子どもが石ころから何の思いもなく、偶然とでたらめが重なって生まれてくることはありえない。だから私の **Something Great** の定義は、「すべての生命の元の親のようなもの」、「すべての生き物の中で働いている偉大な親のようなもの」と定義しています。こういうことを暗号を読みながら「すごい世界があるな」と思いだしました。生きているということは、普通、考えるより、はるかにすごいことなんです。

私はなるべく簡単な生き物を扱っています。たとえば大腸菌であります。大腸菌にどれだけ世話になったか、わからないんですね。今、インシュリンという糖尿病の薬は大腸菌からつくって市販されているんですよ。人のホルモン、人の酵素を大腸菌がつくって市販される。なぜこんなことができるか。今から50年くらい前に医学生物学上の世紀の最大の発見がなされた。遺伝子の構造がわかる。DNAという構造がわかって、その働きがわかります。そしてわかったことのすごいことの一つは、すべての生き物、すべての微生物、昆虫、植物、動物、人間、生まれてきたすべての生き物、これから生まれるだろうすべての生き物が全く同じ遺伝子暗号を使っていることがわかった。だから大腸菌の遺伝子暗号を解読して人のホルモンや酵素に代用できる。

これは科学上の発見だけではなく、人間の考え方に影響を及ぼしていると思います。DNAという観点から見ると、すべての生き物はつながっているわけです。人間だけが特別偉いわけではない。すべての生き物が同じ遺伝子暗号を使っている。すべての生き物は人間にとってはご先祖様か、親戚か、きょうだいかわからない。これは環境問題を考える上で非常に大切で、今の環境問題は一番後からできた人間が、地球上の資源を他の動物を好きなように使っているわけです。しかし私どものDNAスケール、生物の歴史的スケールから見ると、すべての生き物はつながっているということでもあります。

私どもは大腸菌を使ってたくさん研究をやっております。何人もノーベル賞博士が出て、何千人のバイオの博士が生まれたか。しかし今、世界の学者か全員集合しても世界の国家が全部集めてきても、大腸菌一個、元からつくれないです。なぜ元からつくれないか。大腸菌がなんで生きているか、命の最も根本的な原理について何にも知らないんです。しかしこれは昼に言うと値打ちが下がるような気がしま

すので、昼間はわかることだけを講義しています。大腸菌の講義をいくらしても、大腸菌の部品をいくら集めてきても、命は生まれません。これは現在の生命科学がだめなのではなく、生きているということが、細胞一個でも、いかにすごいことかということなんです。

まして人間が生きている、ただごとではない。人間は60兆の細胞からなっていると教科書に書いてある。60兆、本当はしかし誰も数えたことがない。推定60兆なんです。体重1キログラムあたり1兆と計算しています。簡単に60兆とします。兆という数は億の1万倍です。一人の人間の身体の中には地球人口の60億の1万倍の小さな生き物が寄り集まっている。細胞は命なんです。その小さい命が地球人口の1万倍も集まりながら、なぜ細胞同士の喧嘩が起こらないのか。戦争がないのか。見事ですね。細胞は毎日、毎日コピーをつくっています。細胞はプログラム通りに死んでプログラム通りに生まれている。ものすごい勢いで回転が起っています。私どもの身体は4カ月くらいたったら、ほぼ完全に変わっている、骨を除いて。遺伝子には自分の細胞の死とコピーをつくる情報が入っているはずですが。私どもの細胞は何百種類という働きをする細胞からなっている。その細胞同士が自分の独自の働きをしながら付き合わなければ臓器の働きはできないんですよ。臓器は自分独自の働きをしながら他の臓器を助けて私どもの個体を生かしています。なんでこんな見事な調和が保てるんですか。お医者さんは「自律神経がやっている」とおっしゃる。「それじゃ、聞きますけどね、自律神経を動かしているものは何なんです？」。何もわからない。わからないけど、やっている。こんな見事な調和が、助け合いが、情報なしで、でたらめに起こるわけがない。どこかに情報が書いてあるはずですが。どこに。私は遺伝子に書いてあると思っています。

遺伝子の中には「自分のコピーをつくりなさい」という情報とともに「他の細胞を助けて見事に調和を保ちなさい」という情報が入っていなければ、こんなことができるわけがない。まさに「利他的な遺伝子」と呼んでもいいようなものが、私はあると思っています。今、利己的遺伝子の方が有力なんですけど、利他的な遺伝子がなければ生きていけない。これは21世紀に見つかると思います。こういうのが見つかり、仏陀やキリストとか人類の教師が言ってきた「愛」とか「慈悲」とか「助け合い」ということが、一部、遺伝子の言葉で語られる時代が来る。

私どもは子どもをつくると言いますね。私は大分前から「それは傲慢ですよ」と言ってきました。人間は細胞一個も、元からつukれないのに、どうして人間の力で人間の赤ちゃんができるか。それはきっかけを与えます。受精卵をつくるのはジャストヘルプですね。わずか十月十日の間に何十兆個という細胞からなる赤ちゃんをつくるプログラムを書いたのは両親ではない。わずか十月十日の間に人間の胎児は生物の進化のドラマを再現しながら人間になっていくと言われていています。魚類みたいな時もあるんです。哺乳類になって人間の胎児になります。生物の進化は約38億年と言われていています。38億年の進化の歴史を、胎児はお母さんの中の38週が

駆け抜ける。これはものすごいスピードです。お母さんの38週は胎児の38億年なんです。お母さんの1週間は胎児の1億年ですね。お母さんが1日酔っぱらったら、胎児は1400万年酔っぱらっていることになります。アルコールは胎盤を通過するんです。これはお母さんの生活態度が胎児にいかに大きな影響を及ぼすかということですが、もう一つ知ってほしいのは、あのお母さんの中で起こっている受精卵から赤ちゃんまでのドラマは決して人間の力や努力だけではないということです。人間はきっかけを与えて、あとは栄養分を補給するだけ。子どもは両親のものですが、両親だけのものではない。地球生命38億歳なんです。

38億年かかって、**Something Great**、少なくとも人間業を超える大きな力によって赤ちゃんがこの世に誕生する。皆さん方も、できれば自分の年齢に38億歳を足してみてください。少々、年がいったか、いかないかは全部誤差のうちに入りますから。私どもの遺伝子は38億年間、一度も途切れてないんですよ。**no mistake, no accident**、これはすごいことです。人間業ではないんです。38億年の間にはおそらく最初の生物は海で生まれた。その海が何回も何回も大噴火が起こり、マグマが起こって隕石が飛び込んできて海水は煮えくりかえる。ほとんどの生き物は死に絶えました。それをくぐり抜けて地球に上がってきた。今度は地球が大寒波であります。飢えと寒さでほとんどが死に絶えた。それも切り抜けて、私どもは38億年間、**no mistake, no accident**。生まれてきたことがエリート中のエリートです。38億年間勝ちっぱなしでした。そういう意味で人間の生命は尊いと思っています。とにかく生きていくということは私どものような遺伝子とか細胞レベルから言いますと、これはすごいことということになります。

科学をやっているでも本当に不思議とか神秘とかいうものに出会うことがあるんですね。おそらく20世紀の最大の科学者はアルバート・アインシュタインだと思いますが、彼は非常に神秘を感じた。そのことを彼の言葉でいくつも残っております。その一つは「私は、神がどういう原理に基づいてこの世界を創造したのかを知りたい。その他は小さいことだ。優れた科学業績の基礎には世界が合理的、あるいは少なくとも理解可能であるという宗教的感情にも似た信念がある。この信念が私の神の概念である」。科学者は信仰者なんですね。何を信仰しているか。アインシュタインの言葉では「宇宙には真理がある。法則がある」。でなければこんな見事を運営はできない。それを見つけようと科学者は努力してきたわけですから。科学者は哲学者であり、神学者であったわけですから、昔は。彼はまたこんなことを言います。「人生で最も美しくて深遠な経験は神秘を感じることです。これは芸術や科学の分野での真摯な努力と同じく宗教の根底に潜む原理です。この神秘を経験したことの無い者は私にとっては死んでいるか、盲目であるとしか映りません。神秘の経験の裏には頭では理解できないけれども、その美しさや崇高さが直接的にはなくても、かすかに心に響いてくる何かがあると感ずることがあります。これが信心です。そういう意味では私は信心深い人間です。こうした神秘に驚く、この高邁な神秘を心に描こ

うとささやかな努力を重ねる。私はそれだけで満足するのです」。

自然科学をやっているも遺伝子の暗号を眺めながら、これはただごとではない。**Something Great**、**Something Beautiful** なんですね。なぜ **Something Beautiful** か。二つの違う遺伝子暗号が支えながら螺旋階段のところに、びっしりある。32億階段がある、螺旋階段が。ちょっと違うものが支えながら階段を32億段も登っている。まさにこれは **Beautiful** なんですよ、二重螺旋は。命というものが、いかにすばらしく、すごくて神秘的かということ、科学をやっている立場から、これから伝えていきたいと考えております。

ダライ・ラマ法王と4回対談しておりますが、彼は「21世紀は日本の世紀ですよ」と言います。「日本の世紀、なぜですか?」「日本は仏教、神道の伝統があると思っています。そういう精神的な伝統を持ちながら、これほど科学技術が発達し、経済力のある国は日本しかない」と。西洋の科学技術と経済力を得る中で日本人は **Something Great** を感じて生活してきたと思います。たとえば「お天道様」というのは **Something Great** ですね。宗教を超えた偉大な存在、私の言葉で言えば **Something Great** を、日本人は何千年来、考えてきたわけです。「おかげさま」という言葉とか「いただきます」「もったいない」、あれは外国語に訳せませんね。「いただきます」という言葉の中には「動植物の生命を我が生命にいただきます」という意味が入っているのではないかと思います。私たちの食べ物が全部、動植物の生命なんです。この前、国連の統計を見てショックを受けましたが、今、世界中で食糧のために450億頭の動物を犠牲にしています。地球人口の6.5倍の動物の生命を我が食にしているわけです。しかも動物の食糧の必要性が毎年増しています。このままでいきますと動物が出す炭酸ガスで自動車が出す排気ガスの炭酸ガスを上回るのではないかとという統計まであるんですね。動植物の生命をつくった **Something Great** に対する感謝が「いただきます」という言葉に込められている。「おかげさま」もそうですね。「もったいない」も世界の言葉に訳せない。その根底には **Something Great** に対する感謝が入っている。

「ありがとう」も **Thank You** ではないと言っています。「ありがとう」は「有り難い」ことなんです。細胞一個、偶然に生まれることはどれくらい有り難いことか、計算した人がいるんですね。木村元雄さんという世界に誇る有名な進化学者ですが、細胞一個偶然に生まれることはどれくらい有り難いことか。今、1億円の宝クジを買います。それが最低100万回連続当選するような有り難いことが起こった。細胞一個1億円×100万回。それを60兆持っているわけです。私が存在することが有り難いことなんです。あなたが存在することも有り難いことです。その私が、あなたに感謝する。こういう言葉を日本人は持っている。言葉は文化を映す鏡ですからね。何千年来、日本はこういう精神文化で **Something Great** に感謝、**Something Great** とともに生きてきた。日本の持っているこういう極めて精神的な文化と科学技術の力と経済力は日本は世界のために使うべきだと思っております。

私は **Something Great** のメッセンジャーになりたいと思っています。 **Something Great** のメッセージは今まで宗教家が説いてこられた。しかし21世紀は科学者も **Something Great** の話をするべきであると。及ばずながら **Something Great** のメッセンジャーになりたいというのが、これからの私の大きな目標でありまして、「祈りと遺伝子」の研究も、その延長線上にあります。私は今、72歳になりましたしが、私の人生、これからだと。今までは修行であって修行がちょっと長すぎたので少し長生きをして、生命のすごさと日本の文化、伝統の価値を世界に向けて発信していきたいと思っています。

私は、喜びが遺伝子のスイッチをオンにするとと思っています。その喜びは自分の喜びだけでなく家族と一緒に喜ぶ、あるいは周りの人と一緒に喜ぶ。喜びというのは増えていくんですね。ものは人にやると減りますが、喜びは人にやると増える。なぜか。人に喜んでもらうことによって自分の遺伝子のスイッチがオンになると私はと思っています。少なくともすべての生き物は **Something Great** の子どもなんだ。 **Something Great** が一人の子どもを鼻負するわけがない。 **Something Great** の思いは全人類の幸せであります。その証拠に99.9%、同じ遺伝子暗号を人間は皆、持って生まれてきている。パッとせん、おじさんも、ノーベル賞学者も99.9%以上同じ遺伝子暗号を持っている。すべての人は自分の花が咲く可能性があると思っています。SMAPの歌と似ていますが、そんな38億年も勝ちっぱなしできた生き物が、人さまと比較して価値を決められて、たまるかということですね。今は、私どもは人と比較することによって自分の価値を他人の価値を決めています。私は38億年の勝者は人と比較してもらおうようなケチな存在ではないはずだと考えております。

一応、これで話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

一司会 村上先生、どうもありがとうございました。この後、第二部、パネルディスカッションを続けたいと思います。

パネルディスカッション「祈りと遺伝子」

パネリスト：村上 和雄((財)国際科学振興財団バイオ研究所所長
筑波大学名誉教授)

早島 理(滋賀医科大学医学部教授)

澤井 義次(天理大学人間学部教授)

一井上 それではただいまより第二部を始めたいと思います。

一司会(清水) 司会を担当させていただきます花園大学の清水大介と申します。今日はなるべくざっくばらんにいきたいと思います。パネルということではなく、司会はほっといてパネリストの方と村上先生とお話をいただけたらと思います。

パネリストの方をご紹介します。早島理先生でいらっしゃいます。京都大学大学院を出られまして、長崎大学教授をなさり、現在は滋賀医科大学医学部教授です。文学博士であります。研究分野はインド大乘仏教、瑜伽行学派の研究。医学部ですので生命倫理の方でご活躍でございます。主著として『仏教思想の本流』『唯識思想』『梵文大乘莊嚴經論写本』もございます。その他ご業績として先端医療、生命倫理に関する論文など多数ございます。

澤井義次先生。東北大学大学院を終えられ、ハーバード大学大学院で博士号を取得され、東北大学で文学博士を取得されています。専門の研究領域は宗教学理論の研究、インドのヴェーダンタ思想研究、天理教の教義の研究などをされています。『出家遊行者と在俗スマールタツハの信仰』(英文)『聖者たちのインド』『天理教人間学の地平』『天理教とキリスト教の対話』などたくさんの著作と膨大な論文の数がございます。現在、天理大学の人間学部宗教学科教授を務めておられます。

それでは早島先生から村上先生にコメントをしていただき、それに対して村上先生からお答えをいただき、後半を澤井先生にお願いいたします。その後、3人の方とフロアの方でディスカッションをしていただくということでよろしく願いいたします。

一早島 村上先生のお名前は私が医学部に所属した時から耳にしておりまして本もたくさん読ませていただきました。遺伝生物学の先生方の間では村上先生のお名前は高名でございまして、いろんな時に、いろいろな話が出てくるんですが、私が覚えているのは牛の脳下垂体35000頭を研究室挙げて3カ月か半年、明けても暮れても解剖してレニンの研究をされていたと。35000頭の牛の脳下垂体とい

う気が遠くなるような実験の話でした。また、ある会社から研究費を5億円、ポンと出してもらった。「この人に5億円出して仕事をしてもらおう」という、そういう気持ちを相手に起こさせる人って、どんな人なんだろうとずっと思っておりまして、今日、初めてお会いしまして感激しているところです。

私の専門はインド仏教の瑜伽行唯識という学派の研究です。阿頼耶識論という、人間の心を中心として人間の生命を考えていこうという議論でございます。その中で説かれているのは、一つは私なら私が今生きていることを説明する時に、阿頼耶識という考え方を導入しなければ説明できないということが一点と、もう一つインド風に言うと、今の生命は今だけのものではない、始まりのない時から生命をずっと受け継いできた。受け継ぐ働きも、この学派が言う阿頼耶識という心のあり方を抜きにしては説明できないという、非常に大胆な議論であります。

ゲノム遺伝子の理論というのは、インド大乘仏教が人間を理解しようとした理論とずいぶん類似の部分がございまして、先程の村上先生の話にありました生命が始まって以来のものを我々は受け継いでいる。オギャアと生まれた時に38億年分を通過するんだという、すごいお話でございましたが、表現は違いますが、阿頼耶識論も人間の生命だけではなく、生命というものはどこかにつながっていると考えます。阿頼耶識の一番深いところでは、すべての生命はつながっているという考え方です。阿頼耶識論それだけではなかなか受け入れにくいのですが、村上先生のお書きになられたゲノム、遺伝子の考え方を通して読むと、それなりに私にとって理解しやすいという面があります。

折角のチャンスですのでいくつか教えていただきたいと思います。インドの瑜伽行学派は遺伝子の代わりに「種子」と書きます。インドのサンスクリットで「ビージャ」と言いますが、人間の経験の積み重ねが人間存在の中にずっとたまっていくんだという考え方です。片方で阿頼耶識の理論があって、片方でインドの基本の考え方は「縁起」、実体的なものではなく、すべて何かを何かを支え、何かを何かに支えられて生きているという考え方ですが、同時に生老病死、生命あるものは生まれたら必ず年老いて時には病になって必ず死んでいく。村上先生の本には「生と死もゲノムの中に書き込まれている」という言い方で、私には非常によくわかるんですが、その時、村上先生の本の中に生老病死の中の病の部分を、悪い遺伝子がオンになり、同時によい遺伝子がオフになるという形で病気のことを説明されているので、「なるほどな」と思ったんですが、同時に遺伝子に対して「よい」とか「悪い」という人間の価値観を持ち込むことはどうなんだろうかと。仏教の方でも「この世界の中に生きているすべてのものに生命のあり方がどんなに違って、不必要な生命は全くないんだ」という考えがございまして。人間に当てはめた時に、それは我々のように健全なものであっても、現れ方が違って障害を持っているものであっても、生命は変わらない。皆、支えあって生きているんだという発想なので、そこにいわば「よい生命と悪い生命」という概念を持ち込むことはちょっと問題かなと考えますが、

しかし現に人間の中に社会にとって、よいとか悪いとかという価値判断をせざるをえない場合も出てくる。それをどうやってすり合わせるのかというのは、片方で阿頼耶識を抱え、片方でよい悪いという倫理的な判断を抱えながら生命について考えていく時に問題になってくるんです。たとえばガン細胞は医者から言うと、まことに都合の悪い、どうやって取り除くかという文字通り悪い細胞なんですね。人間の方が勝手に価値観を加えているので、細胞自体に、よいも悪いもないのではないかというのと、同時に生きている時に私がガンになったら困りますのでね、さもありませんということ、自分の中で矛盾しているのでありますけど。よい遺伝子、悪い遺伝子、よい生命、悪い生命について、先生にご教授いただけたらありがたいのですが。

一村上 最初から大変難しい質問でどう答えていいかわからないんですが。遺伝子そのものは物質ですから遺伝子そのものに、いい悪いという価値観を持ち込むのは確かに問題だと思いますが、私が、よい悪いと言っているのは、たとえばガンを起こす遺伝子と、ガンを抑える遺伝子を言っているんですね。よい悪いというのは人間にとってよい、健康にする遺伝子はいい遺伝子で、不健康にする遺伝子は悪い遺伝子という、簡単に言えばそういうふうに。あくまでも人間の立場に立って、いい悪いであって、遺伝子そのものは、いいとか悪いとかではなく人間の健康にとって、いい遺伝子と、健康に悪い遺伝子というのがある。ガン促進遺伝子とガン抑制遺伝子があり、ガンを抑える遺伝子はガンを抑える意味でよくて、ガンを促進する遺伝子は悪いと言っていますが、遺伝子そのものに価値があるということではありません。

善玉の細菌、悪玉の細菌、あれも人間が区別するだけで細菌そのものは別によくも悪くもなく、全体の生態系の中で一定の役割をおさめているわけで、この思想は、悪いものを取り除いていきますと、あまり清潔になるとアトピーが出てきたり、あまりクリーンにして悪い細菌を抑えていくと、それに対する反作用が起こる。アトピーなどは昔、なかったわけで、悪玉を抑えてきた、クリーンにしてきた結果だと思ふのです。自然にはおそらく、よいも悪いもないのではないかと。ただ人間が自分の価値観で「これはいい」と決めているだけで、遺伝子そのものを、よい遺伝子、悪い遺伝子と決めつけるのは遺伝子にとっては大迷惑なのです。科学をやっているとシンプルに割り切らないといけませんので、人間にとって都合のいい遺伝子をいい遺伝子、都合の悪い遺伝子を悪い遺伝子と簡単に言っているわけです。もっと深くいくと、悪い遺伝子が必ずしも悪い遺伝子ではない、いい遺伝子がいい遺伝子ではないということもあって複雑なんですね。

陽気な心と陰気な心に分けましたけど、これもなかなか難しく、ストレスを、よいストレスと悪いストレスというふうに分けているんですね。今、ストレスという悪いものになっていますが、確かにストレスは病気を引き起こす原因の一つと認められていますが、悪いストレス、たとえば人間にとって都合が悪い厳しいストレス

も、受け止め方によってはそれをプススに転化することだって、非常に厳しい環境で支えることによってそれが逆にいい刺激になることもある。そう簡単に善し悪しは決めつけられないのはお説の通りです。自然科学者はシンプルですから、あまり深く考えると研究ができませんので、シンプルに考えて結果を出して、そこでまた考えるということだと思っております。大変貴重な意見をいただきまして私も深く考えてみたいと思います。

一早島 有り難うございました。こういう機会ですので、もう一つ仏教の方から教えていただきたいのですが。阿頼耶識の理論というのは、実はもう一つ裏面がありまして、仏教では阿頼耶識的なあり方は「迷いの存在だ」という言い方をいたします。生まれて死んでいく苦しみの存在だと。それに対して「解脱、悟り」というものがあって、阿頼耶識を構成している人間の経験のもとで、私が属しています浄土真宗で言いますと「聴聞」、仏法を聞き、仏法を採り入れることによって阿頼耶識の質を変えていく。変えていくことによって人間存在を質的に転換させる、そういうことを背景においた上で今、生きている私のあり方を阿頼耶識としてとらえていく。その時に仏教の方で言う質的転換、「私の存在そのものが質的に変わっていく」、生き方も含めて、私が変わることは、阿頼耶識の一番深いところではすべての生命につながっていますから、どこかで生きているものすべてが変わっていかなくちゃいけないという発想だと思いますが、そういう考え方と、先生の **Something Great** という考え方が、どこかで一緒になりながら、どこかで一緒にならないことがあるような気がします。どこが違うかと言いますと、私なりの理解なのですが、ゲノムの中にありとあらゆる情報が全部入っていて、後はオンになるか、オフになるかという考え方が一つあろうかと思うんです。

実はそれと同じような考え方で、いわゆる本覚思想、如来蔵思想という考え方があります。悟りはもともと悟りの可能性を自分の中に全部含んでいる。しかし唯識学派も中観学派も含めて、それは元からあるのではなく、修行することによって、時には転換し、時には到達するものであって、はじめからあるものではないという考え方があります。仏教の中でも如来蔵思想的なものの転廻、質的転換をするんだという考え方と **Something Great** というのは、あるところでは非常に類似しているんですが、人間の「悟り」ということを入れた視点から、もう一度 **Something Great** について、ご教示いただけるとありがたいのですが。

一村上 めちゃくちゃ難しい質問で（笑）。どう答えていいか、わからないんですけど。遺伝子にすべての情報が書き込まれているというのも一つの考え方です。たとえば私どもの細胞は受精卵から始まって、いろんな細胞に分化していきます。心臓の細胞の遺伝子も髪の毛の細胞の遺伝子も同じ情報を持っているわけですね。しかし心臓は心臓に必要な遺伝子しかオンにならないんですね。心臓に毛の生えたような奴がおりますけど、どの人の心臓にも毛の生える心臓はあるんです、しかしスイッチはオフです。見事ですね。なんでこんな見事なのか。もとはどの細胞にも、

すべての情報が入っている。最近、話題になっている万能細胞というもの、あれは皮膚の細胞、普通なら皮膚に必要なものしかつからない。ところがあの細胞に遺伝子をたたき込んで刺激を与えてやると、一旦、オフになったスイッチがオンになって万能細胞に先祖返りする。うまくいけば自分の傷んだ臓器をつくることができるということで注目されているわけです。そういう意味で、私どもが持っている遺伝子は少なくともすべての細胞になる可能性を秘めているけれども、環境によってオンとオフが調整されていて、その詳しいメカニズムはわかりませんが、身体的设计図、身体の成り立ちを考えると、そういうふうにしてすべての細胞はすべての情報を持っているということになります。

しかし悟りということと、それは同じようにいくかどうかということが問題ですが、普通の動物はほとんど遺伝子のオンとオフと環境で生きている。人間は学習したり、修行したり、そういうことをやるわけですね。それと遺伝子がどう関係があるかというのは非常に大きな問題で、もっと簡単に言えば才能とか人格と遺伝子はどういう関係があるか。これはこれからの大テーマです。しかし私は遺伝子だけでは決まっていないと思っています。人間は修行することによって違う人格になったり、悪い奴とつきあえば殺人犯になったり、大きなバラエティがあるわけですが、環境因子と遺伝子の相互作用で、その人の才能、人格が決まると思いますが、普通、環境因子というと、どんな国に生まれたとかですが、遺伝子にとっては心も環境因子だと思っていまして、そういう問題をこれから面白いテーマとして考えていきたい。結論的には悟りとその人の遺伝子はどう関係があるかということは、これからの問題だと思っています。しかし今の私の感じでは、病気すら遺伝子だけで決まっていないわけで、生まれつきの遺伝病は別として、生活習慣病などは高血圧のある遺伝子を持っていても食生活を改善することによってスイッチ・オフだったらいいわけで、その人の人格とかは教育とか宗教とかによってずいぶん変わる可能性があると思っています。

一司会 フロアの皆様方からもこの問題に関してご質問があれば、よろしいでしょうか。次の澤井先生にコメントをお願いいたします。

一澤井 私が言いたいことは早島先生がおっしゃってくださいましたが、折角ですので、今日、お話を伺わせていただきまして感想を言わせていただければと思います。

この宗教倫理学会の大きな目的の一つは「宗教と科学の対話」ということにあると思います。普通は宗教と科学が対話することはなかなか難しいのですが、先程先生がおっしゃいましたように「神秘を語る、生きる生命の不思議を語る」という語り方が、科学の言葉と宗教の言葉で、かなり違っていて、同じ場に同席はするんだけど、同じことを同じターゲットでものを語ろうとしているんだけど、宗教者が語る言葉と科学者が語る言葉とコミュニケーションができないということが多いんですが、今日の村上先生のお話は、あたかも先生が宗教者であるかのような、科学者

の言葉であるとともに宗教の言葉でもあって神秘を語ってくださっているという印象を受けました。

先生は Science にも Day Science と Night Science があるんだと。普通、Science というイメージでは3つの原理を科学は持っているのかなと思うんです。一つは普遍性を持つ。科学というのはただ単に地域的に日本にだけ通用してアメリカでは通用しないということではなく、世界中どこでも通用するのか科学です。また論理的であること、ある人には通じるが、ある人にはわからない、ある人にとっては真理ではないということはない。だからこそ客観性を持つ。そういう普遍性、論理性、客観性というものが科学の原理だとすれば、今日、伺った Night Science というのは直観とか感性とかに関わるもので、本当の科学の先端をいっておられる村上先生に、科学的な発想は、たとえばトーマス・クーンなどが言う一つのパラダイムにすぎなくて、ある意味では見方を変えれば同じ神秘、同じ生命の不思議さというものを全く違って表現することもできるということ、今日は教えていただいたのではないか。そういう意味では宗教倫理学会が設立してずっと目指してきた目的への可能性のようなものを教えてくださったのではないかと思います。

今日のタイトル「祈りと遺伝子」ですが、祈りのことは棚次先生も現象学的方法でずっと研究しておられます。私も現象学に関心を持っているものですから、祈りというと、フリードリッヒ・ハイラーというマールブルク大学の宗教研究者が著した本をイメージするんですが、ハイラーは、主体的な祈りというのが宗教の最も中心をなすもので、どちらかというと、儀礼というのは第二次的なもので、祈りに比べて儀礼の意味をちょっと低く位置づけるところがあります。

早島先生がおっしゃってくださった修行とか瞑想とかに関しても、自分がそれを悟る、悟らないにかかわらず、行を行うことによって、先生がおっしゃるような、よい遺伝子がオンになるのか、あるいはオフのままなのかということも教えていただけるとありがたいなと思います。自分は意識しないんだけど、「あなたはこうした方がいい」と、朝、眠いのを起こされて「儀礼に参加するように」と言われて嫌々ながらも、よい遺伝子はオンになるのか。天理教では自己中心的な心を「埃」と言いますが、埃を払うには無意識的に行われる場合がかなり多いんです。人を助けようと思ってしなくても周りから言われて「あなた、あそこへ行ってひのきしんをさせてもらおう」と行って、そうすると、相手から「有り難うございます」と言われてスカッと「やってよかったな」と思うところがあるんです。そういうふうに無意識的に行いながら、だんだんとそういう方向に近づいていく。それが結局、祈りというのが、ある意味で自発的ではないんだけど、結果的にだんだんと近づいていくこともあるのかなと思うんですが、そんなことを含めて、お教えいただけたらありがたいなと思います。

一村上 科学は普遍性があると言われていたんですが、科学にはある条件がついていると思うんですね。そういう条件での真理、正しいこと。条件を変えることによ

って結果が変わることはいくらでもあるわけで、たとえば笑いの実験でも、私は笑いが血糖値を下げると言っていますが、糖尿病の患者さんを筑波から東京の新宿の吉本につれていきますと、あまりいい結果が出ないんです。筑波の田舎の人が新宿で集まるといのが、まずいんですね。出し物が若いもの向きでは、60歳前後の人にとってあまり面白くない。場所を変え、芸人さんを変えることによって条件が変わってくるわけで、科学は、ある条件付きでの普遍性だと考えていただいて、条件が変われば結果も変わるということです。筑波に先週、5人のノーベル物理学賞の科学者たちが来て、その人たちも言っています。「科学は共通の真理があると信じてやっているけど、条件が変わると変わるものだ」と、そういうふうに考えていただいた方が正確だと思うんですね。真理に科学は近づこうとしているけど、真理そのものではない。限られた真理だと考えていただいた方がいいと思います。

行と遺伝子の関係。遺伝子のスイッチ・オンには物理的な刺激でもスイッチ・オンになると思っています。運動する、エイササイズすると筋肉がついてきます。筋肉がつくことは筋肉タンパク質ができることなんです。遺伝子のスイッチがオンにならないと筋肉タンパク質はできませんから、そういう物理的な刺激によってスイッチがオンになる。食べ物によってスイッチがオンになる。それもデータが出てきています。いろんな行為を通して、身体的な動きを通してスイッチ・オンになることは十分ありうると思います。データとしてはあまりないのですが、瞑想とか行とか、お勤めとかによってもスイッチ・オンになる可能性があるのではないかと思います。

私どもが「祈りの研究」を始めたいと思っているのは、雑誌『正論』に「西洋医学の限界を打ち破る新しい祈り」ということで「今、祈りの治療効果が注目されている」と書きましたので、後で参考にしていただきたいのですが、祈りは、どの民族も祈る。宗教も祈りというものがあって、それを最先端科学の遺伝子のことで結びつけたいということをおもは今、思っているということなのですが、科学と宗教がここで新しい出会いをやる。昔は一緒だったんですが、一時別居して離婚している状態なんですけれど、21世紀は両方、科学技術も無視できない、しかし科学技術だけではだめだということで、そういう点で、行とか、心の埃を払うという行為も、いい遺伝子をスイッチ・オンにしているのではないかと考えております。

一司会 澤井先生の質問でありました、朝、早く起きて嫌々ながらやっているという時でも遺伝子のスイッチがオンになることがあると？

一村上 データはないですが、笑いの研究で、笑いで筋肉の体操をする。「笑み筋体操」と言っていますが、笑うということは顔のいくつかの筋肉と関係があって「たこやきグルグルおいしいな」と言うんですね。そういうことをやっていると治療効果があるということがわかっている。面白いから笑うこともあります、笑っていると、だんだんと面白くなるということもあって、やっているうちに嫌々でも身体を動かして筋肉を動かしてスイッチ・オンになることはあると思います。

一司会 澤井先生が無意識的効果をおっしゃっていますが、無意識の領域での何らかの働きというものが遺伝子のはたらきと関係していることもあると？

一村上 それはありうると思いますが、データがないですね。私は「心と遺伝子研究会」をやっていますが、河合隼雄さんが「心と遺伝子の研究も面白いけど、もっと面白いのは魂と遺伝子の研究がオモロイで」「それは先生、面白いですが、これはものすごく大テーマですよ」。河合さんに「先生、本気でやるつもり？」と聞いたら、「本気や」と言うんです。当時、文化庁長官の時でしたから「それなら長官をやめてください。片手間で研究はできませんよ」と言うので「俺は長官（朝刊）やなくて夕刊や」と言っていましたけど（笑）。河合先生は心と遺伝子の先に魂ということを考えておられた。遺伝子というのは今のところ身体的设计図なんですね。せいぜい心の設計図と関係がある。しかし魂というのは大テーマで、「遺伝子に魂があるのか？」というところと多くの科学者は「ない」と言っています。魂は心と身体を超えたものでして、21世紀の大きなテーマで「人間とは何か」という問題を含めた大テーマになってくると思います。祈りも魂と関係があるかもしれないけど、私は、祈りのところまでは行ってみたいなと思っています。

一司会 それではフロアの皆様からご意見とか伺いたいんですが。

一落合 村上先生のお話を聞きまして、自然の精妙な働きの中に **Something Great**、**Something Beautiful** を見るというのは大変納得というか、感動を覚えるくらい、いい話だと思いました。キリスト教の伝統ですと、そういう発想は自然神学、自然の中に自然の働きの精妙さの中に神を見るという神学が、神学の半分を占めていると思いますが、もう一つの半分は啓示神学というものです。**Something Great**、**Something Beautiful** という言い方は「神」と言ったらまずいという意味があって、そのように使われているのでしょうか。つまりキリスト教圏の人だったら、「それが神のことでしょう」と反応されると思うんですけど。

一村上 私が **Something Great** と言っているのは、特に日本人の中には「神も仏もあるものか」と思っている人がかなりいるんですね。その人たちに神とか仏と言うと、そこで拒絶反応があって「これは神さんの話か」ということになります。**Something Great** というのは神さんと仏さんの関係とはちょっと違う立場で「あなたは信仰しようがしまいが、そんなこととはほとんど関係なく、あなたの中に **Something Great** としか呼べない働きがありますよ」という意味で、神、仏ということに極端に拒絶反応している人にも知ってほしいという意味で使っているわけです。深い哲学的、宗教学的意味で使っているわけではないんです。私は **Something Great** という言葉は宗教、宗派を超えて、信仰あるなしを超えて生命の大元、今も生かしているものという意味で、**Something Great** という言葉を使いたいと思って使ってきたわけです。特定宗派に限られたものではなく、普通に言えば「大きな生命」というものと自分では考えて使っているつもりです。

一新井 素朴な質問ですが、先生が人類は単細胞の時代から始まって38億年ずっ

と勝ち抜いてきたのだから生命は大事なんだと表現されましたが、この問題、僕は気になっていて、今、人類は、生物の中で勝利者として生きているのか、それともたまたまいろんな幸運が重なって生きるのを許されて今まで生きているのか。勝ち抜いたと言うと、将来、ひょっとして滅びるかもしれない。そのところをちょっと説明していただきたいのですが。

一村上 難しい質問ですけど、おそらく人類が滅びる可能性はあると思いますね。このまま人間だけが、人間の傲慢性が積み重なっていけば、人類も滅びる可能性はあると思います。勝ち抜いてきたという表現は確かに語弊を生むところがあって、何度かの大絶滅を少なくとも耐えてきた、それをくぐり抜けてきた大きな幸運と奇跡的な幸運で大絶滅を克服してきた。勝ち負けの問題ではないと思いますね。もちろん偶然だということも考えられますが、偶然にしては余りにもうまくできすぎているわけです、人間の身体というのは。そこに「何らかの意思のようなもの」がある。意思と言うと、また問題ですが、意思のようなものがあると十分考えうる。自然科学者であっても考えうるという、そういうふうに思っております。

一ルツジェリ **Something Great** につながる生命のすばらしさを強調されましたが、遺伝子によっては生まれた時から病気の人がいますね。筋ジストロフィで成長すると筋肉がだんだん衰えていく。これも遺伝子の問題で出てくるんですけど、そういう時に、この人に **Something Great** というものがあるのかという疑問が出てくるとは思います。先生にとっては、遺伝性で発症する病気について、遺伝子が狂ってしまったということも、また大きな計画とか、すばらしさの中で必要なものであるのか、あるいは何か間違った方向にいったしまったのかということについて、お考えをお聞きしたいと思います。

一村上 確かに生まれつき身体が不自由で遺伝的要因によってそうなるという場合は十分ありうるわけで、それも **Something Great** の意思かどうかというのは非常に難しい問題ですけど、私は非常にシンプルに考えていまして、**Something Great** が本当に生命の親だったら、生命の親は子どもを不幸にさせたいという親はいないと思います。生まれつき不自由に生まれる、突然の事故で両腕が切断されるとか、そういうものまでも **Something Great** の意思か。大変難しい問題です。私は最近、両手を切断された人で河野さんという人に会いました。この人は両手を切断されたことによって全く世界が一変して、しかしすばらしい世界に入っておられるんですね。子どもと奥さんがいて、45～6歳で両手が一瞬にして切断された。しかし手がないのにすばらしい絵を描かれて講演も3000回くらいやっておられる。一般に考えれば **Something Great** が何でそんなひどいことをやるのかということですが、そういうものからも立ち直れるというか、全く新しい世界に飛び込んでいけるような可能性が人間にはある。すべての人にあるわけではないけど、不自由な身体とか、普通で言えば「神も仏もあるものか」という状況でも、人間というのはすばらしい世界を開拓できる可能性があることを最近しりました。何か起こってきたこ

と自体を、どう自分で受け止めることができるか、それを可能にする、素晴らしい人になれる可能性が少なくとも人間にはあると思っています。遺伝子と心との相互作用によって、人間は神や仏に近い人にもなれるし、極悪人にもなれる可能性もある。そういう点では人間は大きな可能性を持っているのではないかと今は考えております。

—ルツジェリ 私は今、妊娠中ですので、そういう理由もあって質問させていただきました。有り難うございました。

—村上 赤ちゃんは大自然からの **Something Great** からの授かりものだと思います。

—司会 重要な質疑応答が、次から次とされていますが、他にいかがですか？

—棚次 本来なら難しいお話だと思いますが、わかりやすく噛みくだいてお話をしていただき、有り難うございました。タイトルの「祈りと遺伝子」ですが、私は何となく見当がついていますが、具体的にどのような方法でご研究されるのでしょうか。今日、お集まりの中には科学者があまりいらっしゃらないと思いますので、機密事項かもわかりませんが、差し障りのない範囲で「こういうやり方でやりますよ」ということをお話していただければと思います。

—村上 やり方は二つあって、「祈っているその人自身の中に何が起きているのか」、遺伝子のスイッチがオンになっているのか、オフになっているのか。祈りをすることによって、その人にどんな遺伝子のスイッチがオンになったり、オフになったりするかということ調べるのと、もう一つは「祈られている側の中に何が起きているか」を調べることです。西洋医学の限界を打ち破る新しい波という、アメリカでは「祈りの研究」が盛んに始まりだしまして、たとえば東海岸から西海岸の患者さんを祈るという実験がされています。祈りというのも「気のせいやで」という話があるわけですね。「祈られている」というふうに思うと、それだけで人間は安心したりする。昔からプラシーボ、偽薬効果があるんですね。「この薬は絶対効きますよ」と、いい医者から言われると3割は効くんですね。5割効くこともある。新薬を認めるには、偽薬効果を超えないといいけない。メリケン粉を固めたものでも効くわけですからね。ところがこの実験では、患者さんは祈られていることを知らない。医者も知らない。全体の計画をディレクターだけが知っていて、「祈られる群」と「祈られていない群」に分けると「祈られている群の中に明らかに治療効果がある」というデータが出ているんですね。しかし、まだ論争が続いていまして、それは本当かどうか、いろんな条件がありますから。祈られていることによって、祈られている人が何らかの治療効果が上がるということは、そこで何かの遺伝子のオンとオフの変化があるはずだと思っていますから、祈る人と祈られる人の両方を調べる必要がある。

問題は「何の祈りをやるか」ということです。アメリカでは「何の祈りでもいい」となっています。宗派は問わない。自分たちのそれぞれの宗教の祈りで祈る。私ど

もは科学論文として書きたいわけです。科学論文として通るためには、できるだけ客観性を持たせる必要があるので特定の宗教集団でもいいし、それを超えたいろんな宗派の人に自分の祈りを祈っていただいて、その人の中にどういう遺伝子のオンとオフの差があるのか、ないのかということを知りたいと思っています。

祈りの内容とか難しい問題があります。何のために祈るか。「あの人と結婚したい」と思って祈るといふ祈りもあります。これは願いでしょうけど。祈りというもの、少なくとも祈願というものには、「こうしてほしい」とか、日本人がよくやるような「息子が合格しますように」とか「病気が治りますように」とかというものがあります。もっと深い **Something Great** に通じるような祈りもあって、そこをどうしたらいいか、私もまだはっきり整理がついていない。今日、集まってもらった皆さん方に、ぜひ、もっと意見をいただきたいと思っています、これは私からのお願いですが、興味があれば、アドバイスがあれば、私とか棚次先生まで言っていただいて協力していただきたい。あるいはヘルプをしていただくことを考えて、今日、個人的には来ているわけです。そういうことを私の方からもぜひ願って、今後もよろしくお願ひしたいと思ひます。

—(氏名不詳) 村上先生の講演の案内をいただいた時、尋ねようかどうか、ずっと迷っていたんですが、インドの古いヴェーダの中に、いろんなものが書いてありますが、人を祈って人の幸せを祈るといふことと並んで、日本にもあるんでしょうが、人の不幸せを願う、マイナスの祈りの部分がある。日本で言うところと丑三つ時に藁人形に釘を打つとか。もしこの実験で、離れたところで誰にも知られずして「あなたのお子さんが「五体満足」で生まれますように」と一生懸命願う人もいれば「あなたに旦那をとられた人は・・・」という祈りもあるかもしれません。祈りのプラス・マイナスがあるかどうか知りませんが、もし祈りが無関係の人の遺伝子に影響を与えるのであれば、プラスの面と同時に、どこかマイナスの面も起こりうる。プラスだけに働いてマイナスには働かないと、うまい具合にいつくればいいですが、人間のやることですから、効くのであれば、プラスにもマイナスにも効くはずなので、そのへんのところを先生はどうお考えでしょうか。

—村上 これまた難しい問題です。アメリカの実験でも、それは十分考えているみたいで、実験する時の倫理委員会があつて、少なくとも悪い祈りについては認められないわけで実験はできないんですが、できないといつても、やる人がいるわけですね。「この野郎、呪い殺してやろう」といふような。そこは実験者の倫理の問題に入ってくるわけで、プラスに効くんだつたらマイナスも効くということもありうるのではないかと思います。したがって、この問題は場合によっては少し危ないなといふか、実験そのものは、そんなことはやらないわけですが、そういうことが科学的に後で証明されだすと、悪用の可能性は、なきにしもあらずかな。実は私どもも気にしておりまして、そのへんは未だ十分にクリアしていないことです。

私とはとにかく祈りというものを何とか科学の土俵に乗せられないかと、もちろん

祈りという宗教の最も聖なる部分を、今の科学だけで解明できるとは到底思っておりません。祈りというものは、まさに **Something Great** に通じるようなものですから、**Something Great** というものが、まだ科学的にはっきりしていない以上、祈りの全貌を科学で解明することは、おそらくありえないことで、今できる研究手段を使って、きっかけでもつかめないかということです。「祈りと遺伝子」は大テーマなのですが、しかし何とかきっかけをつかみたいなど考えているということです。今のご質問に対しては十分、考えていきたいと思っております。大変いい質問をいただきました。

－司会 次から次とお話が尽きないわけですが、そろそろこのへんで終わりにしたいと存じます。村上先生、どうも有り難うございました。パネリストの早島先生、澤井先生、どうも有り難うございました。最後の方で村上先生に本学会に対してお願いがございましたので、もし協力してやろうかと思われる方は村上先生か棚次先生の方にお申し出いただければと思います。

－井上 どうも先生方、有り難うございました。会場の皆様におかれましては長時間、ご静聴いただき有り難うございました。最後に当学会会長、徳永道雄先生から一言ご挨拶を申し上げます。

－徳永 本日の公開講演会は宗教倫理学会のテーマ、本質にぴったりくるような内容でございまして本当に満足しております。村上先生、わざわざ、つくば市からお出でいただきまして、すばらしい講演をしていただきまして有り難うございます。コメントもディスカッションも非常に充実した内容だったと思います。皆さん方、よくお出でくださいまして最後までご静聴有り難うございました。それではこれで閉会といたします。有り難うございました。

(了)

宗教と倫理 別冊 第8号

2009年11月25日 発行 会員頒布

編集・発行 宗教倫理学会

代 表 落 合 仁 司

発 行 所 〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町高野山 385

高野山大学文学部

室寺義仁 研究室内

「宗教倫理学会」事務局

<http://www.jare.jp/>

郵便振替 00930-4-38499